

ポケモン×ウルトラマンガイア

消しゴム

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ホウエン地方に伝わる伝説の一つに宇宙からの脅威が予言されていた……

ミシロタウンに住むユウキとハルカは互いにそれぞれの道歩み始める

ユウキはポケモンリーグのチャンピオンとして世界一になるためにホウエン地方を離れた

オダマキ博士の娘のハルカは、才能のある若い人材が集まるポケモン研究チームの一員としてホウエン地方を転々とする日々を送っていた

あれから6年…

ユウキは世界一になりホウエン地方へ帰郷することになった

ポケモンとウルトラマンガイアのクロスオーバーです。登場人物は基本ポケモンのみです。ガイア以外の星人や怪獣も登場します。

# 目次

約束	1
第1話 神話：破滅の予言	3
第2話 光の巨人の伝説	5
第3話 襲来	9
第4話 光をつかめ！	14
第5話 ウルトラマンガイア	21
第6話 悪魔の囁き	26
第7話 海の化身アグル	30
第8話 悲しき命（前編）	37
第9話 悲しき命（後編）	43
第10話 再会	48
第11話 新たなる組織	55
第12話 初恋はウルトラマン!?	60
第13話 嘲笑う眼（前編）	67

## 約束

月の光が静寂した水面に写る二人を照らしていた。

「行っちゃうんだね…」

「うん……。自分が世界にどこまで通用するか試してみたかったんだ」

「何となく、そうだと思ってた。どうせ世界一になるまでは帰らないんでしょ」

「はは、ハルカちゃんは何でもお見通しだね」

「すごいなあ…ユウキ君は。私はずっと見てるだけ。グラードンとカイオーガが衝突した時も、隕石が落ちこちて来そうな時も、ユウキ君は世界を救って…私は見てるだけだった」

そのハルカちゃんの顔は悲しそうな顔だった。

「そんなことないよ。僕が戦えたのはハルカちゃんのおかげだから」  
「どういうこと…?」

「この世界を守りたいって思えたんだ。何回も挫けそうになったけど、その度にハルカちゃんの顔が浮かんできたんだ。そして力をくれた。お礼を言うのは僕のほうさ」

ちよつとかつこつけすぎたかな？

「ありがとうユウキ君。でも、それって…」

ハルカちゃんの顔が赤くなっていく。どうしたんだろう?と思つてた矢先、さっきの自分の言葉がとんでもない事を言つてたことに気づいた。

「いや!その!ハルカちゃんの他にもほら!パパやママとかミツル君とかダイゴさんとか」

自分の顔から火が噴き出すように熱い。明らかに動揺してるのはバレバレだろうなあ…。話題を変えなくちゃ。

「ほら、ハルカちゃんはポケモン博士になるために勉強してるんだよね?優秀な若い人達でポケモンを研究する」

「ああ、あの研究会ね。まだ、名前は決まってるけど今後世界の危機を予測できるようにポケモンを通じて研究するの」

「僕がやったことよりもそっちの方がすごいよ！僕はがむしやらに戦ってただけだ」

「ううん、ユウキ君は皆に希望を与えてたよ。私もね、ユウキ君みたく人の希望になれるような事がしたかったんだ」

「正義のヒーローみたいにな、勇気を貰えるような存在になりたかったんだ……」

「出来るよ！ハルカちゃんならきつと出来る！」

僕は小指をハルカちゃんに向けた。

「約束、しよう。お互い自分の夢を叶えるために努力するって。それで、夢を先に叶えた方の勝ち」

ハルカちゃんも笑顔で小指を結んでくれた

「今度こそユウキ君に負けないからね！」

「望むところさ！」

ハルカちゃんとなら何だかって乗り越えられる。僕はこの約束を胸に世界一になることを誓った。

「あ、そーだった！ユウキ君にプレゼントしなきゃね。目、瞑って！」

「え、ええ？」

いきなりの事に困惑しながらも僕は目を瞑った。

……その時自分の唇に柔らかいものが当たる感触が……ええ？

「ハ、ハルカちゃ……」

「ずっと待ってるから。ユウキ君が帰ってきた時、私はきつと変わってる。ユウキ君に追い付いてみせるからね！」

そして小声で

「ユウキ君が帰ってきたらもつとすごいことしようね」

……今までで一番高いモチベーションを持つことが出来そうだ。

そうして僕達は103番道路を南下してミシロタウンに戻った。

# 第1話

## 神話：破滅の予言

「なんだ…これは」

流星の滝の洞窟の最奥部に佇む人影。その眼前には巨大な壁画が記されていた。

「これは若い才能のある研究者達によって発見されたものだよ」

『アルケミー・スターズ』のことか？」

「彼らはこの壁画を発見して以来、脅威に対抗すべく持てるだけの知識をこの対策に注いでいる」

壁画には見たこともない生物達が空を覆うようにして描かれている。地上の人々やポケモン達はその生物によって蹂躪されていた。

「これは近い将来起こりうることなのか？」

「彼らが導きだした答えは、『破滅の予言』だそうだ。その証拠にこの文字を解読してみれば確信できてしまうはずだよ」

その言葉を聞いた青年―ミクリーは言葉を失う。この予言にはホウエンの古代のポケモンの復活が破滅の前兆だと記されていたからだ。しかもここ最近起こる地震の規模や自然災害など全てが一致している。

「しかし、古代のポケモンの力を借りなければ世界は既に滅んでいた。私達の…いや、彼の勇気は無駄だったというのか？答えてくれ、ダイ

ゴ―

「ダイゴは強ばったまま顔を崩さずに、

「さうではないと信じている」

洞窟内にダイゴの声が虚しく響いた

時々思う事がある。この世界にポケモンがいなかったら僕はどんな人生を歩んでいたんだろう？

ルカちゃんやオダマキ博士にミツル君、ダイゴさんやジムリーダーの皆も、ポケモンがいたからこそ繋がった絆だ。世界チャンピオ

ンなんて肩書きもポケモンがいなかったら形無しだ。

僕一人じゃ何も出来ない…。そんなネガティブな思考を巡らせていると、エントツやまが見えてきた。

「久しぶりだな、ホウエン。6年ぶりか…」

実は予定より一週間も早めに帰ってきた。理由はただ一つ、皆を驚かせたいだけ。特に母さんは部屋の掃除を予定日ギリギリまでしないタイプだ。散らかってるのが想像につく。

ハルカちゃん…僕との約束は覚えてるかな？あの時の最後に言った事…：流石にあれは冗談だろうな。

でも、ハルカちゃんは『アルケミー・スターズ』の一員として僕がチャンピオンになる前から人の希望として活動していた。

「今回の勝負は僕の負けかな…」

その時だった。ルネシテイ上空に向けて光の柱が昇っていく。それと同時に僕の背中にあるバツクが光を放っている。

「べにいろのたまが…」

あそこには、目覚めの祠がある。だとすればそこにいるのは当然グリードンかカイオーガなはずだ。

どうやら、ミシロタウンに帰ってる場合じゃなさそうだな。

「ラテイオス、あの光に向かって進んでくれ！」

僕は急いでルネシテイへ向かった。

## 第2話 光の巨人の伝説

ルネシティに着いたユウキはすぐ目覚めの祠に向かう。しかし、光が強さを増し目の前も見れなくなってしまった。

「くそっ……自分がどこにいるかもわからない」

……………を……………!

声が聴こえる……? 僕を呼んでいるのか? 声に導かれるように進むと知っている顔に会う。ルネの長老だ。

「お主は……!」

「長老、通してくれますね?」

長老は少し考え込んだ後、わかった、と小さい声で呟くように言った。

僕は声に導かれるがままに目覚めの祠を進んでいく。

「六年ぶりか……」

ホウエンを離れる前、捕まえた伝説のポケモンはラティオス以外はみんな元の場所に戻した。一つは守り神としてレックウザやグラードン、カイオーガはホウエンにいるべきだと思ったから。

もう一つは……僕自身が暴走したグラードンを止める自信が無かったからだ。たまたまあの時上手くいっただけで、失敗していたら今頃ホウエンは無かったかもしれない。

僕はグラードンから逃げたのだ。僕がホウエンにいない間に暴走したら誰が守れたのだろうか? ダイゴさんやミクリさんがいても止める事が出来たのだろうか?

そうこう考えているうちにグラードンを捕まえたあの場所に来た。だが、奥に進むにつれて光が強くなったためもはや自分の腕も見れや



しない。

すると、鋭い轟音のような鳴き声が聴こえたかと思うと光がみるみるうちに無くなり、僕の目の前には……

「グラードン……」

かつて力を暴走させホウエン地方を危機に陥れそうだったポケモン、僕のパートナーだったポケモンが僕の前に現れた。

「ごめん……グラードン。僕は君を信じきれなかった。本当に、ごめん……」

僕は反射的に謝っていた。今までの重い目を懺悔するかのように。グラードンは何も言わず顔を僕の頬に優しく触れてくれた。

「グラードン……」

救われた気分だった。グラードンは僕を許してくれた。いや、最初から怒っていなかったのかもしれない。きっと僕の葛藤をわかってくれていたのだろう。

「あの声は君だったのかい？僕を呼んでいたのは君？」

僕が声をかけるとグラードンは僕に向かってマグマのようなものを口から出した。

「うわー……あれ、熱くない……?」

マグマのようなものが僕をコーティングするかのように全身を包む。そしてグラードンは僕に背を向けた。

「背中に乗れってことか……」

僕はグラードンの背中に飛び乗った。グラードンはそのままマグマの中に入って行き、僕も背中にしがみつきながら入っていく。さっきのマグマのようなものはこのためだったのかと納得してから約一時間は過ぎた頃だったか。

マグマからグラードンが身を乗り出すと目の前には巨大な壁画が

描かれていた。

空には見たこともない生物がびっしりと詰まっている。そして、それを迎え撃つ二人の巨人の姿が…。

「何だよ…これ」

ポケモンや人間もこの巨人を応援してるように見えるのは気のせいだろうか？

「グラードン…君はこれを見せるために…？」

どういふことなのだろう、グラードンは僕に何を伝えたいのだろうかと考えていると、古代文字があることに気づいた。

「えっと…確かハルカちゃんに貰った解読書がバツクに…」

僕は古代文字を読んでいく。

「……宇宙からの破滅の脅威が迫る時、二人の光の巨人が現れる……」

「……大地の化身ガイア、海の化身アグル……」

「……地球の意思によって生まれたポケモンにより光の巨人の力が授けられる……」

「……地球を正しく導くと信じて……」

正直、理解が追いつかなかった事が沢山ある。宇宙からの破滅の脅威？光の巨人？大地の化身ガイアに海の化身アグル？

ただ一つ、なんとなく理解できたものがある。地球の意思によって生まれたポケモン……

「グラードンのことなのか？」

グラードンが僕をここに呼んだ理由がなんとなくわかった。恐らく僕に力を授けるためだと。

「大地の化身ガイア……」

二人の光の巨人のうち一人の力を僕が？

その時、再びべにいろのたまが輝きはじめる。するとグラードンが呼応するかのよう姿を変え、ゲンシカイキした。そして僕の体も光に包まれていく…。

「うわあああああああああああああ」

べにいろのたまは輝きを一層に増し僕を激しく包んでいくと同時に僕の意識がかすれてなくなっていくた。

……をつか……！

光をつかめ！

### 第3話 襲来

「ユウキ、頑張ってくれ……」

この声は……

「どう……さん……?」

「あなた! ユウキが……!」

「かあ……さん?」

頭に霧がかかったかのように意識が朦朧とする。どうやら僕はルネのポケモンセンターにいるらしい。

「本当に……良かった……」

母さんが泣いてる……。どうやらかなり心配させちゃったみたいだ。僕はベッドから起き上がり腰を下ろした。

「動いて大丈夫か?」

「うん……平気みたい」

父さんが言うには僕は一週間意識を失っていたらしい。というのも、グラードンが祠から僕をポケモンセンターまで運んできてくれたらしく、その時光輝くべにいろのたまを持つていたというのだ。しかし、グラードンが人里に現れたため一時パニックになったのは言うまでもない。

「伝説のポケモンを手懐けてしまうとはさすがだな」

「伝説のポケモンも普通のポケモンも変わらないよ……。みんな、トレーナーのために頑張ってくれる」

「そう……かもな」

そんな話をしていると、ポケモンセンターに見覚えのある顔が入ってきた。

「ユウキさん!」

「……ミツルくん!?!」

トウカシテイのミツル君がそこにはいた。やっぱり六年も会っていないと別人みたいだ。……。もしかして身長追いつかれた?

「良かった……ユウキさんが帰ってきたと思ったら意識不明でポケモンセンターにいるって聞いたときは血の気が引くような思いだったよ。」

本当はもつと早く行きたかったのに忙しくて…」

「心配かけちゃってごめん…」

僕はどうやらこの一週間で色んな人に迷惑をかけたようだ。ダイゴさんやジムリーダーの皆さん、オダマキ博士にソライシ博士、それにマグマ団の人達もお見舞いに来てれてたそうだ。

それに世界大会で知り合ったヒカリもわざわざハウエンに来てくれたらしい。

「さつき忙しくて来れなかったって言ってたけど…」

「あれ？ユウキさんに言っただけ？僕、『アルケミー・スターズ』の一人なんだ」

おっと、中々の衝撃だ。まさかミツル君が『アルケミー・スターズ』の一員だったなんて…しかも僕がハウエンを離れた後にチャンピオンにもなっていたらしい。ポケモントレーナーとして成長出来たミツル君は他の形でポケモンの事をもっと知りたいと思っただけで、勉強漬けの日々を送って晴れて一員になったとか。

「と言うことはハルカちゃんの後輩？」

「そういうことになるね」

「そう言えばハルカちゃんは…？」

ミツル君の今までの明るかった顔を一気に暗くしながら

「実は一ヶ月前に置き手紙を残して行方を眩ましたんだ」

「何だって！」

僕の見舞いにハルカちゃんがいなかったのもまさか……

「父さん、どうしてハルカちゃんの事を教えてくれなかったんだ？」

「一ヶ月も前にいなくなってるなんて…」

「オダマキ博士に言われたんだ。娘の事を言ったらお前は必ず帰ってきてしまう。世界大会決勝を目前だったとしてもだ」

……嫌な予感がよぎる。破滅の脅威の予言…もしハルカちゃんが一人だったら危ない。

「置き手紙の内容は一つだけ。根源的破滅招来体の侵略を止めに行く、と」

「それって破滅の脅威の予言のこと？」

「それを何処で知ったんだい!?ユウキさん!」

どうやら『アルケミー・スターズ』は破滅の脅威を世間には知らせてないみたいだ。素直にグラードンの事を話すか、一応誤魔化しておくか…。そんなことを考えていると、ミツル君が深刻な顔をして僕らにこう言った。

「……皆さんに話していいか迷っていましたが、あなた方を信頼して僕達の秘密を教えます。他言無用でお願いしますよ?」

他言無用とはかなり重要な話題なのだろう。父さんが頷くとミツル君は重い口を開くように

『アルケミー・スターズ』は根源的破滅招来体への対策として∞エネルギーの使用を強行することを決定しました」

僕は開いた口が塞がらなかった。∞エネルギーはポケモンのエネルギーを使うことで強大なエネルギーを発揮できる。しかし、それはポケモンを犠牲にすることと同義なのだ。

「僕やハルカさんを含めた少数派はこれに反対しましたが……圧倒的な多数派意見によつて決定されたことです。」

「君達がそこまでするということは……この予言の信憑性の高さに嫌でも気づいてしまうな」

父さんも母さんもショックが大きかったようだ。その後の話によれば『アルケミー・スターズ』は∞エネルギーをポケモンだけでなく様々な方法を使って確保していく方針らしい。ミツル君も反対派の発言力が無くなった今、彼らを説得出来るようなエネルギー源を探しているという。ハルカちゃんもきつと同じ理由でポケモン以外からエネルギーを得るために……。

大地の化身ガイア…グラードンから授かったこの力はきつとこういう時に使うものではないはずだ。僕はミツル君に光の巨人の力の事は黙っておくことにした。

結局ミツル君には黙ったままだったが、そもそもガイアの力はどうやって使うのだろうか?僕自身がガイアになるのか?それともポケモンみたくガイアをたたかわせるのか?いや、そもそもミツル君は何故????????

『アルケミー・スターズ』の秘密を教えてくださいのだろうか？

そもそもなんでグラードンは僕を選んだのか？海の化身アグルの力は誰に与えられるのか？もし地球の意思で生まれたポケモンがグラードンだとしたら、カイオーガも同じような存在なのか？

そういえば、ヒカリがホウエン地方に来てるって言ってたな。彼女も今、ホウエンでこんなことになってるだなんて思ってもみなかったはずだ。

僕は様々な事を考えながら帰路を辿って行く。でも、一番頭に浮かんでいたのはハルカちゃんのことだった。ハルカちゃんはどんなエネルギー源を探しているのだろうか？出来れば協力してあげたいなんて思っていると我が家が見えてきた。

ミシロタウンに戻った僕達は久しぶりに家族で食卓をかこう。僕に氣を使つてかハルカちゃんの話は出なかったものの

「昔はパパママって呼んでくれてたのに…寂しいわ」

「よ、よしてくれよ！もう17歳なんだから」

「ママはユウキに甘えられたんだよ」

ウチの家族は相変わらずだなあ…

「あつ！ジユカインやサーナイトもわらってる！」

「きつと外にいるボーマンダも笑ってるだろうな」

何だかんだ家族の楽しい時間があつという間に過ぎて行くころ

ゴゴウウウウウウウウウ…

大きな地響きがあつたかとおもうとテレビの速報で

「緊急ニュースです。エントツやま付近に謎の巨大生物が現れました  
近隣の住民はすぐに避難するよう…」

僕は反射的に家を飛び出そうとしたその時、母さんに腕を掴まれていた。

「また、行っちゃうの？」

「うん、僕にしか出来ないことなんだ。だから…」

母さんは目を閉じしばらくした後

「必ず生きて帰ってくるのよ」

と一言だけ言って僕の手を放してくれた。

父さんは何も言わず力強い目で僕を見つめながらゆっくりと頷いてくれた。

「行ってきますー！」

僕はジュカイン・サーナイト・ボーマンダをボールに入れ、ラテイオスを呼んでエントツやまに向かった。



## 第4話 光をつかめ!

「これが破滅の脅威だということのか……!?!」

ミツルはエントツやま付近に現れた巨大生物を見て、ただただ圧倒された。それこそ、伝説のポケモンが人里で暴れているような錯覚を起こすほどのエネルギー量を感じたのだ。

ミツルを含めた『アルケミー・スターズ』は強いエネルギー反応を見つけたためエントツやまへ調査をしていた。すると、ワームホールのようなものがそのエネルギー源だということがわかった。さっそく解析しようとした矢先、ワームホールから巨大生物が出現して暴れまわっているのだ。

「破滅の脅威の予言……。こんな……。こんなことになるだなんて……」

ミツルの隣にいた『アルケミー・スターズ』の同僚は呆然としていた。目の前にいる人間でもポケモンでも無い生物こそが、自分達が倒すべき根源的破滅招来体なのかと。

「ミツルくん!」

「ダイゴさん!」

リーグ元チャンピオンであるダイゴが現場に駆けつけたのだ。

「これが君達の言っていた……」

「前兆に過ぎないのかもしれませんが」

「前兆……こいつが前兆に過ぎない?」

『Cosmic Organism—vanguard』通称コツヴは激しく暴れまわる。そしてエントツやま付近にある一軒家に向かって動き始めた。

「お婆さん、急いで!」

ヒカリはこの家を脱出しようとお婆さんを家の外へ連れ出した。

「ムクホーク、お婆さんを安全なところへ」

ムクホークはヒカリも一緒に乗るよう促したが、足腰の弱いお婆さんの安全を考え、ヒカリは断った。元はといえば世界大会で仲良くなり恩人でもあるユウキのお見舞いのついでにしばらくハウエンにい

ようと思い、まずはフエンタウンの温泉を目指してエントツやまを指していたが道に迷ってしまい、クタクタになったところをこのお婆さんに助けてもらっていたのだ。

「大丈夫！エンペルトやガブリアスもいるから！でも、早めに帰ってきてね」

クホークは主人の言うことを断れずそのままお婆さんに乗せて飛んでいった。

「やつば、怪獣がこっちに向かって来てるじゃん…！」

その時、3つの戦闘機がヒカリの上を通ってコツヴに向かって行った

「あれは…戦闘機？」

ダイゴは空を指差して言った。

「あれは『アルケミー・スターズ』が極秘で開発していた戦闘機です」

「…じゃあ、あの戦闘機を動かしているのは」

「ツルはぐつと手を握りながら」

「…∞エネルギーです」

と、一言だけ呟いた。

「そうか…地球の危機とはいえ、∞エネルギーを使わざるをえないとは…」

そう言うときダイゴはエアームドをボールから出して、

「僕やポケモンの力じゃ何も変えられないかもしれないけど、やるだけやってみるよ」

「ダイゴさん！」

そのままダイゴはエアームドに乗ってコツヴに向かって行く。

三機の戦闘機はコツヴの顔面目掛けて∞エネルギーを使った強力な光線を放つ。コツヴは光線を受けると苦しみだしたため、ダメージを確実に与えている。だが、すぐに回復してしまいコツヴは腕についてる鎌で不用意に近づきすぎてしまった戦闘機を一つ落とす。その光景を見た他の二つは一旦遠くに離れようとしたが、それを待っていたと言わんばかりにコツヴは角から光線を放ち残りの二機も撃墜

してしまおう。

「そんな…∞エネルギーを搭載した戦闘機が…」

ミツルは絶望した。自分は∞エネルギーに反対はしていたが∞エネルギーがあれば少なくとも破滅の脅威に対抗できると考えていた。しかし、現実には∞エネルギーを使っても全く歯が立たなかった。もつと沢山の∞エネルギーを使うとしてもそんなことを繰り返していくうちにホウエンからポケモンはいなくなってしまうだろう。

根源的破滅招来体に対する術はもう無くなってしまったのか？

「メガメタグロス！ありったけのパワーで電磁浮遊をするんだ！」

メガメタグロスは高く浮き上がりコツヴのちょうど顔の辺りまで浮いた。

「そのままコメットパンチだ！」

「メターツ！」

メガメタグロスパンチはコツヴの顎を捉え、倒れはしなかったもののダメージが入ったようだ。コツヴが鎌で攻撃しようとしたところで、ダイゴはメガメタグロスをボールに戻す。

「危なかった…いくらメガメタグロスでもあれを受けたらひとたまりもない」

コツヴがダイゴに向かって光線を放とうとした時、ダイゴはネンドールとボスゴドラを繰り出し

「まもるだ！」

ネンドールとボスコドラは二人がかりでまもるがコツヴの光線に耐えられず、受け流してしまう。その光線が一軒家、ヒカリのいる場所に流れてしまったのだ。

「しまった！」

ヒカリはエンペルトとガブリアスとともにムクホークの帰りを

待っていた。あの怪獣がこつちに来ていたのはわかっていて。こんなところ早く抜け出したいと思っていてその時、流れ弾がこつちに向かってくるのではないか。

「ひっ……！」

エンペルトとガブリアスはとっさにヒカ리를庇った。しかし、彼らはその光線を耐えきれず瀕死になってしまう。

「エンペルト！ガブリアス！」

二匹とも世界大会で勝ち抜けるほど屈強なポケモン達だ。しかし、コツヴの光線の前にいとも簡単に倒されてしまう。

「くそっ！」

一軒家に人影を見つけたため、少なくとも無事だというのがわかったダイゴだったが、コツヴは容赦なく光弾をダイゴに放つ。

「わあああああ！」

ダイゴとポケモン達はそのままハジツゲタウンの方向に飛ばされてしまった。

コツヴは暴れる事を止めずにあちこちに光弾を乱射する。そして光弾がヒカリのいる方向へ放たれた。

「早くエントツやまに……！」

ユウキは双眼鏡に目を通し、コツヴの様子を見ていた。だがダイゴの善戦も束の間、ダイゴは吹き飛ばされてしまう。コツヴが激しく暴れ始めエントツやま付近はいよいよ地獄絵図になってきた。しかし、ユウキは見つけてしまった。地獄の中にヒカリの姿があるのを。

ラティオスはこれ以上スピードが出ない。手持ちのポケモンをメガ進化させてもこの距離じゃ意味がない。

すると、怪獣の光弾がヒカリに向かっていくではないか。このままだとヒカリが危ない……！

「どうしたら……どうしたらいいんだあー！！！」

ユウキが叫んだ瞬間、周りが時間が止まったかのように静止する。

「何だ……これ」

すると、バツクが光輝く。べにいろのたまが眩い光を放っているのだ。ユウキはべにいろのたまを取り出すとたまは一層輝きを増していく。そしてついにべにいろのたまは砕け散ってしまう。だが、その光は失われることなくユウキを優しく包み込んでいく。

「大地の化身……ガイアの力なのか？ だったら僕に力を貸してくれ！ ヒカ리를……この世界を守りたいんだ！」

その時ユウキは強い光の中に消え、それが光の速さでヒカリのいるところに向かって行く。

ヒカリは恐怖で足がすくんでいた。自分の今までの事が走馬灯のようにおもいだされた。ポケモンと一緒に旅がしたいと言ったが両親に反対され、逃げるように家を出たあの日。リーグチャンピオンになっても家に帰れぬまま、世界大会へ行ったあの日。ユウキに会って、心が救われて本当に楽しかったあの日。もう私の人生が終わっちやうんだ。

コツヴが光弾をヒカリに放った次の瞬間強い光がそれを遮った。

「え……う？」

ヒカリは目を疑った。光が弱くなったかと思うとそこには信じられない光景があるのだから。

「光の……巨人……」

巨人はヒカリの安全を確認するかのように見つめると、コツヴの前に立ちふさがった。

コツヴは鎌で巨人を斬りつけようとするが、巨人は飛び上がってコツヴの後ろにつける。そしてコツヴをエントツやまに向かつて投げ飛ばす。投げられたコツヴは苦しみだし、巨人がすかさずコツヴに馬乗りして殴り付ける。コツヴの悲鳴がハウエン中に響き渡ったと思えば角からビームをだして巨人を吹き飛ばす。しかし、巨人はすぐ立ち上がりドロツプキックをかました。

「す、すい……」

ヒカリの口から思わずでる言葉。さつきまで地獄だったこの場所が光と希望に満ち溢れている。

巨人はコツヴを肩に担ぐように持ち上げエントツやまに向かつて投げた。コツヴもすぐに立ち上がり光弾を放つが巨人に避けられてしまう。巨人は再び飛び上がったかと思えばそのままキックを繰り出しコツヴの顔面を捉えコツヴは再び悲鳴を上げる。

しかし、コツヴはありったけのパワーを使って巨人に光線を放つ。巨人は手をクロスさせ防御をするが防ぎきれずに強力な光線を体に直接受けてしまう。巨人は倒れ、胸にある光が点滅する。

「まさか…ピンチ？」

ヒカリは思わず最悪の状況を思い浮かべてしまった。巨人が怪獣に倒されてしまうシナリオを…。

それでも巨人は力強く立ち上がると光が巨人に集まっていく。巨人はその光を頭に集めるように体を屈ませ一気に力強く光線を放つ。その光線はコツヴを捉えるとその巨体は爆散した。

「勝ったの…？」

巨人はそのまま空に消えていった。

「ハア…ハア…」

僕がやったんだよな？ ガイアになつて…僕があのだ巨大生物を倒したんだ。

ガイアの力…本当にハウエンを、この世界を救ってくれるかもしれない。この世界は滅びたりしない。この、ガイアの力が有る限り…！

「……………ユウキ？」

「ヒカリ！良かった、無事だっ……うわ!？」

ヒカリはユウキを見つけたかと思うとユウキの胸にとびつき泣きじやくった。

「怖かった……本当に、怖かった……」

ユウキはヒカリの背中を優しく撫でながら

「もう、大丈夫だから……本当に頑張ったね」

ヒカリが泣き止むと光の巨人について語り始めた。光の巨人に助けられたこと、怪獣を倒したこと。

「名前、何て言うのかな？」

「さ、さあ……」

「あのね、いい名前思い付いたの！」

「ウルトラマン！光の巨人ウルトラマン！」

## 第5話 ウルトラマンガイア

コッヴの出現の後、テレビは根源的破滅招来体と光の巨人の話題で持ちきりだった。『アルケミー・スターズ』の目的、根源的破滅招来体についてもテレビ番組で討論されていた。光の巨人の特集も生まれ、あの巨人は味方なのか？敵なのか？しばらくはどのチャンネルを回してもどれかの話題しかやらないだろう。

ユウキはそんなことも知らず、朝帰りで帰宅した。……ヒカリと一緒に。前もって連絡したから大丈夫なはずだと思っても、ドアを開ける時に一応深呼吸をした。

「ただいま」

「おかえりなさい！あら、友達ってヒカリちゃんのことだったのね！」

「お邪魔します！おばさま」

「あ、あれ？知ってるの？」

「僕は予想外過ぎて困惑してしまう。」

「何言ってるの！あなたが気を失ってる間にお見舞いに来てくれたたのよ」

ああ、そう言えばそんなことも言ってたっけ？でも、接点はそのくらいしかないのに随分と仲が良い気がするけども。

「ヒカリ、ホウエンに来て間もないから家を拠点にしてあげてもいいかな？」

「お願いします！」

「モチロンよ！きゃー、娘が出来たみたい」

「ありがとうございますう！」

そういつてヒカリと母さんは抱き合う。調子の良い二人組だ。そう言えば父さんがいないな。ジムの仕事に行ってるのかな？あ、お茶がある。母さん、注いでくれたのか。いただきます。

「しかし、こんな可愛くて器量の良いお嫁さんが来るなんて幸せ者ねユウキは」

「僕はお茶を吹き出してしまった。」

「いやいや、そういう関係じゃないから！」



こういう話題は苦手だ。冗談だとわかっていても顔が熱くなってしまう。

ヒカリは「お母様ったらお上手なんだから」と満更でも無さそうに言っている。て、お母様って…

「あ、ユウキにはハルカちゃんがいるもんね。はっ、まさか二股!? ママはこんな子に育てた覚えは…」

「ああー！もういいでしょ母さん！」

僕が怒ると「やり過ぎちゃったかしら？」と言って引いてくれた。ふう、やっとな落ち着けるな。

「へえ、広いねー！」

母さんの決定によりヒカリは僕の部屋を使うことになった。

……………落ち着けるか！

「はあー、なんか疲れちゃったよ…」

「あ、着替えるからこっち見ないでね」

僕は音の速さで机に顔を突っ伏した。

そういえばヒカリの家族ってどんな人達なんだろう？ヒカリの両親なんて本人に似て底抜けに明るいんだろうなあ。僕は突っ伏したまま聞いてみることにした。

「ねえ、ヒカリの両親って…」

「私、親の話はしたくないから」

ヒカリは冷たい声で拒絶するように喋った。どうやら、聞いちゃまずいことだったみたいだ。

「顔あげてもいいよ」

顔を上げるとヒカリはTシャツに短パンとラフな格好をしていた。ボデイレインが妙に強調されていて直視し辛い。

「ねえ、ハルカちゃんって隣に住んでた子なんでしょ？どんな女の子だったの？」

ヒカリの興味はハルカちゃんに移ったみたいだ。

「明るくて元気のいい子だったよ」

でも、たまに連絡を取り合うくらいで6年も会ってないんだ。見た

目も印象も僕との繋がりも全てが変わっていてもおかしくはない。

「彼女？好き？」

「あ、あのねえ……。別にそういう関係じゃないから。ただの友達だから」

「……………本当に？」

嘘を言ってもしようがないとヒカリに言うと、突然ニヤニヤして僕の顔を見始めた。また何かからかうつもりか？

「ねえ、ウルトラマンってどこから来たのかな？」

「ウルトラマン？ああ、ガイアのことか」

思わず口にしてしまった「ガイア」という単語。ヒカリはすぐに「あっこんできた。」

「ガイア？あの巨人はガイアって名前なの？」

「い、いや！僕なりの呼び方だけだよ。ヒカリのウルトラマンと一緒さ」

必死に嘘をつく。少し苦しいか？

「ウルトラマンにガイア……。そうよ！あの巨人はウルトラマンガイアよ！」

ビビったときと言わんばかりにはしやぎだすヒカリ。

『ウルトラマンガイア』か……。悪くない。むしろかっこいいかも…

その時、ミツル君からポケナビでモニター電話がかかってきた。『アルケミー・スターズ』がガイアの事についてどう思っているかを知りたい僕は電話をでることにした。

「ユウキさん、突然電話してゴメン。あの怪獣と光の巨人のことで話をしたことがあるんだ」

「ちよつと！光の巨人じゃなくてウルトラマンガイアだよ！」

ヒカリが突然電話に乱入してきてしまった。

「あ、ごめん。邪魔しちゃったかな？」

「全然してない！そういう関係じゃないから！」

今日何度目の台詞だろうか？ミツル君は小声で「そういう関係じゃないのに部屋に連れ込むなんてさすがユウキさんだ」と言っていたよな気もしたが無視した。

「それより、あの巨人はウルトラマンガイアって名前なのかい？」

「いや、僕達二人が勝手につけた名前だけどね」

「うん、中々いい名前だと思うよ。もうすぐ会議があるからその時に提案してみるよ」

ヒカリは後ろで喜んでいたが僕は早く情報が欲しかったので、まずはミツル君に怪獣の事についてのデータを出すよう頼んだ。

「あの怪獣の名はコツヴ。僕達の今の技術力だと歯が立たなかったけど、破滅の脅威の予言としてはあれが前兆だと考えてる。ウルトラマンガイアが来てくれてなかったらどうなってたか…」

あれが前兆だとは根源的破滅招来体の恐ろしさを改めて思い知る。

「それにあの怪獣が暴れたことで各地で不審なエネルギー反応が発見されているんだ。もしかしたら、ハウエンに眠る脅威を呼び覚ますための刺客だったのかもしれない」

コツヴで小手調べといったところか。コツヴの出現で新たなポケモンや怪獣が目覚めてしまうのかもしれないとは根源的破滅招来体はいよいよ地球に本格的に攻撃してくるということか。

「ウルトラマンガイアは恐らく僕らの味方なのだと思う。あの無限にも感じるパワーはまさしくこの世界の救世主だと言っているいい。」

僕はこの説明を聞いて改めてガイアの力隠し通そうとおもった。『アルケミー・スターズ』はポケモンに変わるエネルギー源を探しており、自分達の力になるのであればガイアもその対象に入るだろう。元が人間だと知られたらしつこく交渉してくるに違いない。

すると、ミツル君のモニター側が騒がしいことに気付く。ミツル君はゴメンと謝ると通信を切ってしまった。

「もしかして…また怪獣が？」

そうかもしれない。ミツル君の言っていた事が正しかったらこれから怪獣が続々と現れる。しかも、地球産だ。

ゴウウウウウウウウン……！

またあの地響きがハウエン中に伝わる。僕とヒカリは急いでテレビ速報を確認したところ、またしてもエントツやま付近に怪獣が現れたというのだ。

「ヒカリと母さんは家に居て！」

僕はそういうと家を飛び出しラティオスを呼んでエントツやまに向かう。

ヒカリは自分も行くと言うことが出来なかった。怪獣を目の前にした恐怖が頭をよぎるだけで足がすくんでしまう。すると、その様子をみたユウキの母がそっとヒカリの肩にポンと手を置いた。ヒカリはだんだん安心していくとともに自分の母親と比べている自分に気が付き自己嫌悪に陥った。

ユウキは上空に行くときさかさ輝くモンスターボールを取り出す。そのモンスターボールにはガイアに変身する際に使う光があるのだ。そのモンスターボールを開けるとユウキは光に包まれていく。

「ガイアーーーーーッッ！」

ユウキが叫ぶとウルトラマンガイアに変身し、エントツやまに向かって行く。

しかし、ユウキは気づかなかった。尾行している影に。

「やっぱり……あなたが力を授かったのね」

ラティオスに乗った人影はそのまま反対方向へと消えた。

## 第6話 悪魔の囁き

ギールの出現から約三分後に赤い光の巨人、ウルトラマンガイアが現れた。

「デユアアア！」

ガイアが着地をするのと同時に周りの大地が土埃のように舞う。ギールもガイアの存在に気づいた。

「光の巨人だわ！早くカメラを回して！」

コツヴの取材でたまたま来ていたテレビ局のスタッフ達がガイアの雄姿を撮ろうとカメラを構えた。ギールの出現の危険を顧みず粘っていたおかげだと喜ぶスタッフ達。

「こちら現場のマリです！光の巨人が現れました！巨人は人類の救世主なのでしょうか？ギールとの戦闘を生中継でお送りします！」

ギールは四足歩行の怪獣で、コドラのように背中は鋼鉄のような硬い物質で覆われている。ガイアは空高く飛び上がり背中に蹴りを入れるがダメージを与えた様子は全くない。ガイアは一旦着地しようとするがギールがそのタイミングに合わせて体当たりを入れると、ガイアは大きく飛ばされてしまう。しかし、ガイアはすぐに立ち上がりギールの顔を思いつき蹴り上げた。

「デユアアア！」

ギールは蹴りの衝撃で大きく仰け反り仰向けに倒れた。すかさずガイアが飛び上がりギールの腹部に踵落としを繰り返す。ギールは背中が硬い物質で覆われているが、腹部はとても柔らかい。ガイアは仰向けになったギールに跨がり滅多打ちにする。

するとギールの胸のコアの部分が開き赤い水晶体が露になる。ガイアは拳をその水晶体に繰り返す。

その時だった。ギールは赤い水晶体からマグマエネルギー弾を発射しガイアは飛ばされエントツやまに激突してしまう。ガイアはすぐに反撃しようとしたがギールがもうスピードで体当たりをした後、ガイアの腕に噛みつく。

「グワアア！」

ガイアが苦しそうな声を上げる姿をみたマリは

「光の巨人がピンチです！このまま救世主が怪獣にやられてしまうのでしょいか!？」と現場実況を続けていた。

ギールはそのままガイアを押し倒し馬乗りになる。ガイアの胸についでる光、『ビームランプ』が赤く点滅し始めた。ギールはおいちをかけようと胸のコアを開き、水晶体を剥き出しにしてマグマエネルギー弾を放とうとしたその時、ガイアはそのタイミングを待っていたと言わんばかりに水晶体にパンチを繰り出す。

「デエアアアア！」

ギールは今までのどの攻撃よりも苦しみ始めるとガイアは立ち上がりギールとの距離を取る。

「ハアアアア！デユアアアアアア!!!」

エネルギーを頭頂部に集約し、光線が鞭のようにになるとガイアは屈んだ後に仰け反り、その反動で勢いよく頭を前へ突き出すと光線は光刃と化し、ギールに一直線に進む。

ギールはその光刃を受けると爆散した。

「み 見ましたか!？光の巨人がコツヴを倒した時と同じ技を使って怪獣を倒しました！全国のテレビの前の皆さん！光の巨人に大きな拍手をー！」

「ガイアは「今世紀最大の映像が撮れたぞ！」と喜ぶテレビ局のスタッフ達の様子をみた後、空に消えていった。」

「ユウキ！無事だったのね」

「うん、毎回心配かけてゴメン母さん」

「ユウキ！ガイア、ほんっつとうにかっこよかったんだから！ユウキはどうしてたの?」

「僕は現場にかけつけたがガイアが来たので安全なところで観戦していたと言っておいた。」

「現場のマリです！先ほど『アルケミー・スターズ』の発表により光の巨人の名称をウルトラマンガイアに決定しました。我々人類の救世主は根源的破滅招来体をきつと倒してくれるでしょう!」

どうやらウルトラマンガイアに決まったようだ。ヒカリも自分達の案が通って大喜びしている。身体は疲れきっているがホウエンの平和を守れたと思えばなんてことはない。

「光の巨人特集を改めましてウルトラマンガイア特集を現地で続けた……ア……ガ……」

アナウンサーの様子がおかしい。目は虚ろになり何かに操られているかのように身体がぎこちなく動く。カメラが切り替わらないのはカメラマンもテレビに映ってないだけで同じ状態なのだろうと推測できる。

「ど、どうしたんだろう?」

ヒカリは困惑した顔で画面を見つめる。するとアナウンサーが口を開いた。

「地球の生物よ。我々は貴様達が根源的破滅招来体と定義するものだ。この人間を使って貴様達に忠告しに来た」

根源的破滅招来体だ!!? 全国放送の番組を使って奴等は何をいに来たのだ?

「我々はすでに地球を侵略し始めている。地球が我らの手に落ちるのも時間の問題だろう。但し、我々の提案を飲み込めば地球から手を引いてやる」

手を引くだって? 本気なのか? 奴らの目的は地球という星自体では無かったということか? 様々な思考が頭を支配するなか、根源的破滅招来体は信じられない言葉を言い放つ。

「人間かポケモンのどちらかを絶滅させたら我々は手を引く。選ぶのは地球の生物達だ」

ポケナビでテレビ中継を見る少女がいた。どこか知的な雰囲気を感じさせ、思わず見とれてしまうようなルックスのクールな美女。

「やはり予言通りになるのね……」

ホウエンに住んでいた古代人はどのようにして予言を残したのか? その謎はまだ解けていないにしても私がやることは変わらない。

「人間は愚かな生き物……ポケモンは人間にいいように利用されてい

る。地球を守るには……」

根源的破滅招来体の言いなりになるつもりはない。しかし、自分の中ではこの答えが地球にとって最善だと結論づけた。

「根源的破滅招来体の破滅……そして人間の破滅。絶対に成し遂げてやるわ」

少女はラティアスを呼ぶ。ラティアスは主人を乗せ空に消えていった。



## 第7話 海の化身アグル

連日テレビを賑わせているのはやはり根源的破滅招来体の”忠告”だった。

人間とポケモンのどちらかを絶滅させたら地球侵略を止める。きつと奴らは僕達人間だけでなくポケモンにも問いかけていたのだろう。テレビの討論番組では人間もポケモンも根源的破滅招来体と戦うべきだという声が多数だ。しかし、ポケモンを絶滅させよという意見も少なくない。

根源的破滅招来体と戦うべきという意見が一番最善かもしれないが、コツヴやギールに人間やポケモンの力が及ばなかったのは事実だ。ウルトラマンガイアがいなければ今頃どうなっていたかわからない。ガイアの力の及ばない生物が現れたら地球の終わりだ。全滅するよりはポケモンの絶滅を選ぶという意見が少なくないのは必然かもしれない。しかし、ポケモンが絶滅したところで根源的破滅招来体が地球侵略を本当に止めるとは考えづらい。

ただ、ひとつとして人間が絶滅するという意見はなかった。人間だから当たり前かもしれないがポケモン達からすればたまたまのものではない。特に野生のポケモンは人間が絶滅しても今まで通りに生活できるからポケモン側から見れば人間が絶滅してもいいと思うポケモンもいるのではないか？

こんな時、ハルカちゃんなんて言うんだろう。きつとハルカちゃんもポケモンと人間が戦うことに賛成するだろうな。いや、ポケモンも人も傷つけない方法を探してくれるに違いない。

「ねえ、ユウキ」

「どうしたのヒカリ？」

「ガイアってなんで私達を助けてくれたんだろうね？テレビじゃ救世主なんて言われてるけどさ、どこから来て何をしに来たんだろう？」

ヒカリの素朴な疑問。僕は少し考え込んでそれらしい言葉を見つける。

「きつとガイアも地球に住んでいたんだよ。自分の星が危ないってわかったから僕達の前に現れたんじゃないかな？」

グラードンに連れられ、壁画に描かれていた予言。地球自身が自分を守るためにガイアがいるのだろうか？

「ガイア、きつと地球が好きなんだね」

ヒカリはそう呟くといきなり元気になり始めた。

「ユウキー！わたしミナモデパートに行くんだ！一緒に来てくれる？」

ヒカリは僕を誘ってくれた。

「ごめん、ミツル君とトクサネで会う予定なんだ」

「なーんだ、つまんないのー。確かミナモにはポケモンコンテスト会場があるしそっちにもよろうかな」

「それがいいよ。じゃあ僕はトクサネに行くからついでに乗ってく？」

「うん！ありがとう」

僕はラティオスに乗って家を出た。……ヒカリにくつつかれて少し恥ずかしかったけど。

ヒカリをミナモに送った後、僕はトクサネシティの宇宙センター前に来た。六年前とは比べ物にならないほど大きくなっている。埋め立て地により土地は広くなったが、トクサネの敷地の半分以上が宇宙センターになっていた。

僕は中に入り、待ち合わせ場所のロビーに行くとミツル君が待っていた。

「ユウキさん！待ってたよ」

ミツル君は僕に会うなり『アルケミー・スターズ』の近況を報告し始めた。∞エネルギーの開発は結局止められなかったこと。怪獣が現れたときにデータを解析できるプログラムを作っていること。ついでにダイゴさんの無事が確認されたことも。

「僕ね、ウルトラマンガイアが現れたとき神様が僕達を救ってくれたとおもったんだ。でも、昨日の根源的破壊招来体の忠告で救いを求めるだけじゃだめなんだってわかったんだ」

ミツル君は目を輝かせ

「昨日、ウルトラマンガイアとギールの戦闘でヒントを得られたんだ。ギールの胸に水晶体があるのは知ってるよね？」

ギールの水晶体はマグマエネルギー弾を発射する場所でありながらギールの弱点でもあった。まあ、ガイア本人は勘で攻撃しただけなんだよね。

「どんなにパワーのあつて大きい生物でもポケモンのように弱点があるんだ。その弱点を見つけて大勢のポケモンが力を合わせて攻撃すればきつと倒せる！開発中のデータ解析のプログラムはその助けをしてくれるんだ」

ミツル君は力強く言葉を言い放っていく。

「僕達はウルトラマンガイアに頼ってばかりじゃダメなんだ。ポケモンと人間とウルトラマンガイアが力を合わせて脅威に立ち向かうんだ！」

僕がミツル君に初めて会った時の印象と大きく違っていた。男の子なのにどことなく守りたい雰囲気させる子だったのに、今は地球の危機に立ち向かう一人の立派な男だ。

「だから、僕に協力してくれるかい？ユウキさん」

ミツル君の覚悟が伝わってくる。快く承諾したかったがガイアの事があるので保留にしておいた。ミツル君はすでにダイゴさんや他のジムリーダーの協力を得ているらしい。

「ミツル君、きつと君の思いはホウエン、いや全国中に伝わるはずだ。怪獣のデータ解析のプログラムが出来るまではきつとガイアが地球を守ってくれる」

僕はそうミツル君に告げて宇宙センターを後にした。

ミツル君のように勇気のある人間がいる限り、ウルトラマンガイアがいる限りこの世界は滅びたりしない。

ガイアの力が僕に授けられたように、海の化身アグルの力を授かった人がどこかにいるはずだ。ハルカちゃんの行方もわからない今、僕のやるべきことはアグルの力を持つ人間に会うこと、ハルカちゃんを探すこと。まずはカイオーガに会うために海底洞窟に向かおうかな。

「いやー、いっぱい買っちゃった。このエネコドール、ユウキの部屋に置いたら怒られるかな?」

ヒカリはホクホクとした顔でデパートから出た。シンオウにはこんな広々とした海が見える町は少ない。海岸で景色を楽しもうとした時、一人の少女が海を見つめていた。

「あの一、あなたも海の景色を?」

ヒカリが訊ねると小さく頷いた。

「私、シンオウから来たんです。ハウエンって良い所ですよね」

少女は空を見上げた後、ヒカリに質問をしてくる。

「もし、ポケモンだけの世界と人間だけの世界があるとしたらどっちが平和だと思う?」

突拍子もない事を訊いてきたが、ヒカリは

「両方いる世界が一番平和だとおもうなあ」と答えた。

「今が本当に平和だと思う? 根源的破滅招来体抜きに考えても今の地球は人間によって様々な問題を抱えてるわ。地球を汚し、増殖し続けたいと思いきやポケモンからエネルギーを無理矢理奪う。人間はポケモンとの共存を謳いながらポケモンを利用することしか考えていない愚かな生物よ」

「そんなことないよ! そういう人達もいるかもしれないけど少なくとも私や友達はそんなことしない!」

「じゃあ人間の存在理由が解る?」

「存在理由?」

ヒカリはなぜ少女がこんな事を訊いてくるのか分からなかった。だが、ヒカリは彼女の質問に真剣に答えなければいけない気がしたため自分なりの答えをだす。

「具体的なものはないけど…これから見つけていくっていうのはダメなのかな?」

少女はその答えを聞くと、ただ一言

「人類はそんなことを言うには過ちを犯しすぎたのよ。到底償いきれるものではないわ」

その時、おくりびやま付近にワームホールが出現し、金属生命体が現れた。すると海の中から一匹の怪獣がヒカリ達の目の前に現れた。

「か、怪獣!」

「……………」

少女はその怪獣を確認するとラティアスに乗ってどこかに行ってしまった。ヒカリは少女の行方も気になったが今はミナモシテイにいる人を避難させる事が第一だ。

「あの時は何も出来なかったけど…私は自分に来ることをする!」  
ヒカリは手持ちのポケモンを繰り出し住民に避難を呼び掛けた。

ユウキはポケナビでミツルと通信をしていた。

「あの怪獣達は!」

「一匹は宇宙からワームホールでやって来た金属生命体、もう一匹は地球の怪獣だ!」

ワームホールでやって来たということは根源的破滅招来体なのだろうか?

「ごめん、ユウキさん。プログラムが完成していない今、僕は…」

「大丈夫さ。きつとガイアがミツル君の思いに応えてくれる」

通信を切り、僕は光が入ってるボールを開ける。

「ガイアアアーツ!」

ユウキは光に包まれウルトラマンガイアに変身した後、おくりびやまに向かう。

おくりびやまの前にあるサファリゾーンでアパターが何かを待つ

ているように辺りを見回してる。地球にはない金属で覆われている体を除けば、人のような姿や胸にビームランプがあるためどこことなくガイアを彷彿とさせる。

するとガイアは空から現れ着地の際に土埃を舞わせた。アパターは待つていたと言わんばかりにガイアに向かってくる。

ガイア向かってくるアパターを受け止め背負い投げを見舞わせる。しかし、アパターはすぐに立ち上がり距離を取りはじめる。

「デエアー！」

ガイアが構え直すとアパターも構え直す。まるでガイアをコピーしたかの如く立ち回るアパター。

その時、ミナモシテイ方面からゴルザが現れた。ガイアはゴルザとアパターに挟み撃ちにされてしまった。

「グオオオオン！」

ゴルザは突進をしてきたため、ガイアはそれを受け止める。するとアパターの腕がサーベルになり、がら空きになったガイアの背中を切りつける。

「グワアア！」

ガイアは切りつけられて力が緩んでしまったためか、そのままゴルザに倒されゴルザに身体を踏みにじられる。

（くそっ、二対一じゃ上手く戦えない！）

するとゴルザは身体中のエネルギーを頭頂部に集め、アパターに光線を放った。アパターはサーベルを盾に使うが弾かれて光線を受ける。

（どういうことだ？仲間割れか？）

ガイアは隙の出来たゴルザを蹴りあげ挟み撃ちにならないよう離れた。アパターは立ち上がるとゴルザを滅多刺しにし始める。

「ギャアアアア！」

ゴルザの轟音のような叫び声がホウエン中に響き渡る。ガイアはアパターにドロップキックを喰らわした後、頭頂部にエネルギーを集めて放つ光刃ーフォトンエッジを放った。

「デュアアアアア！」

アパテーはフォトンエッジを受けると爆発と共にその場に倒れた。ガイアはエネルギーを使ったためビームランプが赤く点滅し始めた。ゴルザは地中に穴を掘り逃げていったようだ。

ガイアが膝をつくとき、アパテーがサファリゾーンの砂地エリアの砂を鎧にして復活した。

(くそっ！奴も限界に近いハズなのに…！)

ガイアは膝をついたまま動く事が出来ない。連日の度重なる戦いによってガイアのエネルギー量が少なくなっていた。

「グウウウ…！」

アパテーがサーベルをガイアに突き刺そうとしたその時、サファリゾーンの北の海から青い光刃が一直線に飛んでくる。砂を纏ったアパテーは今度こそ爆散した。

ガイアがサファリゾーン北の海を見ると、青い巨人が海の上を立っていた。

(青い巨人…まさか！あれが海の化身アグルなのか!?)

アグルはガイアを一瞥するとそのまま海に消えて行った。ガイアも大空に飛び上がり消えた。

この戦いをミナモデパートから見ていたヒカリは驚愕していた。ウルトラマンは一人ではなかった。あの青いウルトラマンは何者なのか？

「きつと…ガイアの仲間よね…！」

ヒカリはあのウルトラマンの名前を考えながらミシロタウンに帰ることにした。

## 第8話 悲しき命（前編）

ヒカリはユウキの家に帰ろうとしている途中、103番道路でミノシテイで出会った少女を見つけた。彼女の言いたいことが分からなかったヒカリは直接聞いてみることにした。

「また会ったね。無事で良かった」

「……………」

「この池の前で何をしていたの？」

「別に…」

なかなか質問にきりだせないヒカリ。すると、突然少女の方から話題を振ってくる。

「貴方は自分と友達は私の言う愚かな人間ではないと言っていた。ならば貴方達の存在理由は何？」

ヒカリは少女の突拍子の無い質問に答える。

「私、存在理由とかそういう難しい事はわからない。でもこの地球で生きているってことに理由はあるのかな？」

少女はヒカリの答えに少し驚く。しかし、ヒカリの答えに反論するかのように

「地球の寿命を削る人間に存在理由がいらぬ？そんな傲慢な種が増殖し続けたせいで地球上の人間以外の生物は迷惑を被っている」

「でも、貴方も人間でしょ？なんでそこまで人間を憎めるの？」

少女はヒカリの言葉に応えようとしなかった。これ以上話が出来ないと思つたヒカリは少女に別れを告げ帰ろうとする。その別れ際少女はヒカリに伝言を頼む。

「あなたの友達に伝えてくれるかしら？怪獣も好きで暴れ回ってるわけではないと。怪獣ゴルザが金属生命体とガイアの両方に攻撃をした理由を考えてみなさい、とね」

ヒカリは何故少女がそんなことを言うのかわからない。ユウキにこの伝言を伝えて何になるのか？

「人間をどうして憎めるのかと貴方は言ったわよね？答えは簡単よ」

少女はヒカリの目をみつめて言う。



「私は人間ではないもの」

「僕は今日現れた青い巨人のことや逃げていったゴルザのことで頭がっぱいだった。」

「海の化身アグル……やはり僕と同じように誰かが変身しているのだろうか？僕がグランドンから力を授かったようにきつとカイオーガも同じことをしているに違いない。つまりあの壁画も見ているはずだから仲間だと考えていいのかもしれない。現にアグルは僕を助けてくれた。」

「ただいまー。じゃなくておじやましまーす」

「僕があれこれ考えてる内にヒカリが帰ってきた。」

「ユウキー！伝言があるんだけど……」

「伝言？誰から？」

「えーと……名前、聞き忘れちゃった」

「しようがないなあ」

「と、とにかく伝言だよー！」

「僕はヒカリの伝言に耳を傾ける。怪獣も好きで暴れ回ってるわけではない。ゴルザがアパターとガイアに攻撃した理由を考えてみるというもの。」

「僕はその言葉を聞いてハツとする。そもそもゴルザは地球の生物でコツヴによって無理矢理起こされただけにすぎない。慣れない地上に現れたために目の前に写る生物を敵だと思い込んでいてもおかしくはない。」

「こんな単純な事に何故気づかなかつたんだろう？僕はもしかしたら人里に現れてしまっただけの怪獣を倒してしまったかもしれない……」

「怪獣ともわかりあえるのかもしれない。人間とポケモンが共存して生きてるように」

「僕がそう言うのとヒカリは優しく微笑んでくれた。」

そして話題はあの青い巨人の話になる。ヒカリは住民を避難させた後、デパートの上で観戦していたらしい。

「あの青いウルトラマンかつこよかったなあ」

「どうやらヒカリは青い巨人を気に入ったようだ。」

「ガイアに青いウルトラマン、根源的破壊招来体なんてあの二人ならば、バースンとやっつけちゃうんだから！」

「同じ地球を守る者。力を合わせれば、きつと。」

「あ、このエネコードル部屋に置いていい？」

「いいよ。でもカビゴンドールはどかさないでよ」

ガイアがアパテーと戦って5日もの時間が経った。

ゴツヴが襲来して以来、ジムリーダーのアスナはエントツやま付近を散策していた。理由は一つ、かけがえのないパートナーであるコータの行方がわからなくなってしまったからだ。生息地を中心に様々な場所を探したがみつからない。

「ごめんナギ。いつも付き合わせちゃってさ」

「大丈夫。それに元気の無いアスナをこれ以上見てられないもの」

「ありがとう…。よし、今日はユウキやフウとランも来るし、絶対見つけるぞ！」

彼女は親友のナギと今日もコータスを探す。彼女のコータスの最大の特徴は片眼に三本の引っ掻き傷があることに加え、体の蒸気を出す穴の一つがハートマークであること。

そして彼女は知らなかった。かけがえのないパートナーと最悪の形で再会することになる事を。

コータスは何処へ行ってしまったんだろう？僕はフエンタウンのフレンドリイショップの前でフウとランを待っていた。

「おーい！」

二つの声が重なる。どうやら来たみたいだ。

「待たせちゃってごめんネ」

「ランがおめかしに時間かけちゃってさ」

久しぶりに見た二人は以前の瓜二つというほどではない。フウは若干声変わりもしているし、ランはより女の子っぽくなってる。

「今日こそ見つかるといいネ！」

「そうだね。アスナさん元気を装ってるけど本当は胸が張り裂けそうなくらい落ち込んでるはずだから」

「早くいこうよ！」

僕達はエントツやまへ向かった。しかし、その日エントツやまに一つのワームホールがあることに僕達は気づかなかった。

アスナさん達と合流した僕達はコータスを探したが結局見つからない。  
ない。

アスナさんとコータスは子供の頃から一緒に片時も離れたことはないそうだ。僕も初めて出会ったジュカインとはこれからも一緒にいたいと思っている。だからこそアスナさんの気持ちかわかるし、彼女のためにもコータスを見つけてあげたい。

「ねえ、あれって何かな」

フウとランは何かに気がつく。なんとエントツやまの頂上にワームホールが現れていた。

「まずい！怪獣が出現するぞ！」

僕達は急いで避難する。するとワームホールから巨大な怪獣が現れた。その怪獣は亀のような甲羅を持ち、体の血管が浮き出ている。そこにマグマが流れていることがわかるくらい太く大きい血管。で

も、その姿はまるで…

「……フウ、あれって」

「ラン……僕も同じことを考えてた」

そう、コータスに酷似していたのだ。

「そんなはずないっ！」

アスナさんは声を荒げた。しかし、僕達は見つけてしまった。

片眼の三本の引っ掻き傷とハートマークの穴を。

「コータスなの…!?私よ！アスナよ！」

「私の声が聞こえないの!?コータス!!」

怪獣の耳にはアスナの声は届かない。

怪獣はフエンタウンの方を見るとそこに向かって炎の渦を巻き始

める。フエンタウンの建物は次々と炎に包まれてしまう。

「いけない…！フエンタウンに戻りましょう！」

「僕はあるの？注意を引く。フウとランはフエンタウンに戻る間にミ

ツル君と通信を繋げてくれ」

「了解！」

「……………」

「アスナ！今はそうしてる場合じゃないのは貴方自身がわかっている

でしょう！」

「……………うん。行くよ。絶対コータスをたすけるんだ」

弱々しい声でアスナさんは呟くように返事をした。

フエンタウンの有り様は酷かった。燃えていない場所がないと思えるくらいに火災地獄。親を失い泣き叫ぶ子供達。どうやら大人が子供を優先的に避難させたが助けた大人達は間に合わなかったらしい。鼻をつくような焦げた臭いやどす黒い煙が町全体を包む。

「酷い…」

「こんなことって…」

ランはヤドラン、フウはヤドキングを繰り出しハイドロポンプで町を消火しようとするが焼け石に水だ。

ナギはポケモン達を使って住民を安全な場所に避難させる。アスナはというとただ茫然としているだけだ。コータスとアスナが大好きだった町は炎に包まれ、コータスを可愛がってくれた大人達もいなくなってしまう。黒い煙が目染みて涙が止まらない。

「コータス……どうして……」

怪獣の雄叫びがハウエン地方に響き渡った。

## 第9話 悲しき命（後編）

「ユウキ！ミツルから怪獣のデータが届いたから送るね！」

「ありがとうフウ、ラン！」

ユウキはコータスの気を引き付けていた。なるべくフエンタウンから離すように動き時間を稼いでミツルの怪獣のデータを待っていたのだ。

「やつぱり、あれはコータスか……」

コツヴが現れた時にアスナさんのコータスは行方がわからなくなった。恐らくコツヴが襲来する時に現れたワームホールが閉じる時に飲み込まれてしまったのかもしれない。そして根源的破滅招来体に目をつけられあんな姿になったとユウキは推察した。

するとコータスはユウキに向かって勢いよく火炎放射を吐き出す。ユウキとラテイオスはその火炎放射を避けたが、コータスはすぐさま炎の渦でユウキ達を巻き込む。

「しまった、ミロカロス！ハイドロポンプで消火するんだ！」

ミロカロスはハイドロポンプで消火しようとするが炎は消えない。コータスはその隙に火炎放射を吐き出しユウキ達は墜落してしまった。

「あつー！」

「いけない！ユウキさんが！」

ナギ達の心配も束の間、目の前が激しい光に包まれたかと思いきや光の塊がコータスに体当たりする。コータスはそのまま111番道路のロープウェイ乗り場付近に吹き飛ばされる。

「あれは……！」

「ウルトラマンガイア！」

「デエヤア！」

光の巨人、ウルトラマンガイアが登場した。周りの人達はみなガイアが来たことに喜んでいた。一人を除いてだが。

（力がみなぎってる……！）

変身するのに日にちが空いたため、今までよりガイアの力が大きく

なっているのをユウキは感じた。

コータスはマグマエネルギー弾を発射するがガイアがそれを手で弾き飛ばしてしまう。

「すごい……！」

「今までよりパワーアップしているのかもしれないですね」

「……………」

ガイアはコータスに近づき顔にチョップをお見舞いする。コータスは怯むことなく突進を試みるがガイアはそれを受け止め首を掴んでコータスを地面に叩きつける。

「デエアアア！」

ガイアが蹴りの連撃を浴びせフィニッシュに蹴りあげるとコータスの巨体は空に上がる。そこへすかさずガイアが飛び上がり踵落として再びコータスは地面に叩きつけられた。

「デエアアア！」

ガイアは地面で苦しんでるコータスを持ち上げイントツやまに激突させた。コータスはこの連撃で相当なダメージを受けている。

ここがチャンス、ガイアがさらに追い打ちをかけようとしたその時だった。

「もうやめてくれーっ！ガイアアアアアアア！！」

泣きじやくったアスナがガイアに叫ぶと、ガイアは立ち止まってしまふ。コータスはその隙にフエンタウンを焼き付くした時よりも大きい炎の渦をガイアに繰り出す。

「グアアアアア！！」

より熱く、より苦しい炎はガイアの体力をどんどん奪って行く。渦は激しさを増しデコボコ山道のポケモンの住処にまで燃え移ってしまう。ポケモンの悲鳴に似た鳴き声が痛々しくイントツやま付近に響き渡る。

ガイアのライフゲージも点滅し、絶対絶命かと思われたその時、炎の渦が大量の水によってかき消される。

「地球を守りたいと思う者はウルトラマンだけではない！」

ミクリが自分の持てるだけの水ポケモンでガイアの炎の渦を消し

ただ。

「ゴツヴには不覚をとったが同じミスは二度としない。ネンドール、ひかりの壁―!」

ダイゴがひかりの壁を自分の他にガイアやミクリ、フエンタウンの人々に張る。

ダイゴに向かって火炎放射を発射するコータス。ダイゴはボスゴドラとネンドールにまもらせると炎の勢いがなくなる。

「やはりそうか…。ひかりの壁で威力を弱らせたら怪獣の攻撃でもまもるで耐える事が出来る―!」

そしてファイアローに乗ってミツルがやってくる。

「ウルトラマンガイア、僕達に任せて―みんな!準備はいいですか? 持てるだけの力をコータスの蒸気が出ている部分に集中してください―!」

ミツルがジムリーダーに呼び掛ける。

フウとラン、ナギもミツルの作戦に勘づいたようで自分のポケモンを全てボールからだして一斉にコータスに向ける。

「ジバコイル!でんじはで動きを止めるんだ!」

キンセツシティジムリーダーのテッセンもかけつけコータスの動きを止める。

「今です!コータスに攻撃を!」

ジムリーダー達のポケモンがコータスの蒸気が出ている部分に攻撃をする。コータスはマヒをしているため無防備のまま一斉攻撃を受け、瀕死になった。

「皆さん!コータスに回復の技を使ってあげてください。正気に戻るかもしれません!」

ミツルは最初からコータスを倒す事を考えていなかったのだ。怪獣のデータ解析プログラムを完成させた事で正気に戻す可能性も見ることが出来た。

「よし!チリーン、いやしの鈴!」

「サーナイト!いやしの波動ネ!」

フウとランがコータスを正気に戻そうとする。ガイアも自分の光



を集め優しい光線をコータスに浴びせる。

「コオー……」

コータスの顔色はみるみる良くなっていく。そしてコータスは正気に戻った。

「コータス！良かった……本当に……」

アスナは安堵の表情を浮かべる。そして大量の涙が彼女の眼から再び流れ落ちて行く。

「良かったね、アスナ！」

フウとランもアスナが元氣を取り戻して嬉しくなった。コータスがいなくなってから久しぶりに本当の笑顔を見た気がする二人。

コータスは辺りを見回す。変わり果てたフエンタウン、ポケモンの住処が燃え尽きポケモンの死骸の山になってしまったデコボコ山道。大きくなっている自分の姿。そして、泣き腫らした最愛のトレーナーの顔。

コータスは何かを察したようにガイアを見る。そして、ガイアの顔を見つめ始めた。

ガイアはコータスが何を望んでいるのかをすぐに理解した。しかし、ガイアはそれを躊躇してしまふ。

「どうしたのさ、コータス!？」

アスナがコータスに声をかける。コータスはアスナの方を向いて涙を一筋流す。その涙は石炭となってアスナの手のひらの上に落ちる。

「コータス……?？」

ガイアは決心し、頭頂部にエネルギーを集める。なんと、ガイアはコッヴやギールを倒したフォトンエッジをコータスに撃とうとしているのだ。

「ガイア……!?何してるの!？」

「コータスは正気に戻ったんだよ!?!ガイアだって手伝ってくれたじゃないか!？」

フウとランがガイアに叫ぶような大声で止めようとする。

「いやだ……やめて……お願い……」

自分の最愛のパートナーであるコータスの気持ち理解出来てしまおうアスナ。それでも彼女はガイアを止めるような声を出そうとする。とても弱く、消え入りそうな声で。

その時コータスがアスナの方を向いてニツコリと笑う。

「ハアアア！デュアアアアア!!!」

ガイアのアオトンエッジが放たれ、コータスは爆散した。

「コータスウウウ!!!」

「どうしてさー！どうしてガイアは助けたコータスを倒したんだ！」

「私、納得していないヨ!!」

フウとランは激怒している。そこへやって来たのはダイゴだった。

「コータスは自分の罪を理解していたんだ。自分の奪った命の数を」

「「それでもー！」」

「仮にコータスが生きていても被害がこんなにも出てしまった以上、世間は許さないだろう。自分が生きていることで最愛のパートナーにも迷惑がかかるとわかっていたんだ」

フウとランはダイゴの言葉に閉口する。

「ウルトラマンガイアが怪獣を倒すために光線を放ったのか？それともコータスの気持ちを汲んで光線を放ったのか？」

ダイゴはやるせない気持ちで言葉を紡いでいく

「その答えが地球の運命を決めるのかもね」

## 第10話 再会

今までの怪獣で一番の被害をもたらしたコータス。人々は未来に不安を覚えるのと同時にウルトラマンガイアという希望を持っている。

ウルトラマンガイアが何者なのか？何故地球を救ってくれるのか？人々はまだ知らない。

ユウキはアグルの存在を確かめるためにカイオーガに会うことにした。しかし、わざわざ海底洞窟まで足を運んでもカイオーガは何処にもいなかった。ひとまず休憩するためにユウキはキナギタウンに訪れる。町が妙に騒がしいと思い、人の集まっている所に行くユウキ。

「なんだこれは…！」

キナギタウンに流れ着いていたのはホエルオーの死骸だった。しかも三体も。

「こいつはひでえ…。食いちぎられてるやがる」

「こつちはハサミで切られてるみたいね。シザリガーの仕業かしら？」

町の人々がそれぞれ思っている事を口にだす。噛み跡もハサミの傷もとてもポケモンとは思えない大きさである。だとすれば当然考えられるのは…

「怪獣か…」

また新たな怪獣が現れてしまったのだろうか。ユウキは地球の怪獣の仕業なのか？と考えたがキナギタウン付近には地球の怪獣の生体反応が無かったとミツルに言われたはずだ。

ユウキはカイナシテイまでの海底を調べることにした。カイナシテイのクスノキ館長も何か知ってるかもしれないし丁度良いだろうと考えた。

「マリルリ、ダイビングだ」

海底は暗いがポケモン達の楽園かと見間違うほど、目の前にびつしりとポケモンがいた。何故か一つの場所にポケモンが集まっている。

「これは……まさか!」

なんと怪獣の死体に群がっていたのだ。ハサミも大きな口も無いためどうやらホエルオーを亡きものにした怪獣ではないみたいだ。ユウキが見たことがない怪獣だったので、ポケモンに倒されたのかも知れない。いや、もう一人のウルトラマンがいるではないか。

「こいつを……アグルが?」

かつて自分を救った巨人。海の化身としてカイオーガから力を貰った人間が何処かにいるはずだ。

「アグルも地球のために戦っている。僕もやり遂げないとな」

すると、見覚えのあるポケモンがユウキの目の前に現れる。このポケモンは確か……

「ハルカちゃんのサニーゴ!」

サニーゴはユウキを導くようにカイナシテイに向かう。ユウキはマリルリにサニーゴを追うよう指示した。

「本当に会えるのか……ハルカちゃんと」

ユウキは期待と裏腹に説明出来ない不安を抱いていた。

「……くる。ユウキくんも……怪獣も……」

カイナシテイ上空をラティアスで飛んでいる少女はスーパーコンピューターを遥かに上回る性能を持つ特別なポケナビを使って怪獣の場所を予測していた。

カイナシテイ南の砂浜に降りる少女。周りには家族連れやカップルで海水浴を楽しむ人々がいる。

「これから何が起ころのかも知らずに……」

少女はカイナシテイに向かった。心なしか、緊張した面持ちで。

僕はサニーゴに導かれカイナシティに着いた。カイナシティ中を走り回りハルカちゃんを探す。いつもより手に力が入り、心臓もドクドク鳴っている。

カイナシティ灯台前に知的でクールな雰囲気醸し出している少女がいた。まさかと思い灯台に向かう。

それは行方不明になっていたハルカちゃん本人だった。

「ハルカちゃん…」

「久し振りね、ユウキくん」

六年前の元気澆刺とし、いつも笑顔だった彼女の面影はない。物静かなながらも眼の奥には熱いものが燃えている、僕はそういう印象を抱いていた。

「みんな心配していたんだよ！今までどこに行ってたのさ!？」

「何をしてたと思う？」

ハルカちゃんの事だ。根源的破滅招来体と戦うために、∞エネルギー以外の物を探していたに違いない。僕はそう言うとハルカちゃんはフツと小さく笑う。

「それも合ってるけど、本当にしたいことではないわ。それに、もう見つけたのよ。新しい力を」

「何だって!？」

その時だった。カイナシティ南の砂浜に怪獣が現れたのだ。その怪獣は大きなハサミを持っており、恐らくホエルオーを殺した怪獣に違いないだろう。

「あいつの体は海水で出来てるの。体温も海水と変わらない。だから怪獣の生体反応を感知する機械だけではあいつを見つけて出ることが出来ない。体が海水だからといって蒸発させようとすればカイナシティは焼け野原になる。人間やポケモンが太刀打ちできる相手ではないわ」

ハルカちゃんは怪獣の出現に何も驚かずじつと怪獣を見つめ解説する。逃げ惑う人々に目もくれない。

「ハルカちゃん、ここは逃げてくれ。僕があいつの気を引き付けて時間を稼ぐから」

「その必要はないわ」

ハルカちゃんはそう言う腕に着けていたリング『アグレイター』をかざし光に包まれる。

「デエヤアアアア!!!」

砂浜に降り立った青い巨人。

海の化身アグルがそこにいた。

「まさか、ハルカちゃんがアグルだったなんて……」

僕は未だに目の前にある光景を信じる事が出来ない。カイオーガから力を授かったのはハルカちゃんだった。

怪獣がアグルに向かって突進をしてくるとアグルはジャンプして後ろに回り、重い蹴りを連続して入れる。怪獣はバランスを崩して倒れると、アグルは尻尾を掴み振り回し海岸付近の岩場に叩きつけた。怪獣が苦しんでいる隙にハサミの付け根を引きちぎるアグル。

「強い……」

恐らく海底で見つけた怪獣もアグルが倒したのだろう。僕がガイアの力を手に入れるずっと前から侵略する根源的破滅招来体と戦っていたに違いない。

アグルは自分のエネルギーを右手に集め、光の剣『アグルブレード』を発現させる。そしてそのまま怪獣を切り刻む。

「シュワアアア! デヤアア!」

「圧倒的じゃないか……」

僕がアグルの勝利を確信しかけた時、怪獣の体は再生した。アグルに切り刻まれた傷も引きちぎられたハサミも元通りになっていた。

「ハッ!?」

アグルが驚いた一瞬の隙を怪獣は見逃さない。ハサミでアグルの首を締め付けるとアグルのエネルギーを吸いとり始めた。

「グオアアアア……!」

「ハルカちゃん！」

とうとうアグルのライフゲージが点滅し始める。僕はボールを取りだし光となつてガイアに変身する。

「ガイアアアアア!!」

赤い光が強さを増しガイアが砂埃を舞わせて着地した。ガイアは怪獣に向かって走りだす。

「デュア！」

ガイアは手から小さな光線を出し、アグルの掴んでたハサミの根本を切り落とす。アグルは怪獣の拘束から解かれハサミを首から外した。

「ハア！デュアッ！」

ガイアは怯んでいる怪獣に連撃を浴びせる。そして相手の頭に回し蹴りを喰らわせると怪獣の頭が飛んだ。しかし、首が無いまま突進でガイアを押し倒すと体が再び再生し始め大きなハサミでガイアを拘束する。そしてハサミからガイアのエネルギーを吸収し始める。

「グアアアア！」

ガイアのピンチにアグルは自分の体に光を集め始める。そして大きな光球『リキデイター』を作り出し怪獣にぶつけた。

「デエエヤアア!!」

リキデイターを受けると怪獣はガイアの上で爆散した。

アグルはガイアをしばらく見つめた後、空の彼方へ消えた。ガイアもアグルを追うように消え、カイナシテイに平和が訪れた。

赤い夕日がカイナシテイ南の砂浜を照らす。そこには二人の人影がある。

「ハルカちゃん、君がウルトラマンだったなんて…」

「ユウキくんがガイアの力を手に入れるずっと前から私はアグルとして人々の影で戦っていたわ」

少なくとも失踪した時点ではアグルの力を持っていたんだろう。僕はハルカちゃんと共に戦う事が出来るのに嬉しくなる。

「一緒に戦おう！根源的破滅招来体も二人の力を合わせればきつと倒せるよ」

「元よりそのつもりだったわ。でもねユウキくん、私が本当にしたいことがあるって言ったのを覚えてる？」

「え…？」

ハルカちゃんはそう言うと、彼女が言ってるとは思えない言葉を僕に向ける。

「私は根源的破滅招来体の根絶と人間の破滅、この二つを貴方に手伝ってもらいたい」

僕の聞き間違いだろうか？

「地球にとって人間はガン細胞よ。増殖し続けいろんな所に転移しては地球を汚し他の生物のエネルギーも奪う。根源的破滅招来体に対抗できるのは人間なんて愚かな生物ではない！」

「ハルカちゃん！何を言ってるんだよ！」

「ユウキくん！私に協力することが貴方のすべきかことよ」

「それが君の本当の意思なのか!?!」

ハルカちゃんは少し間をおいて

「その通りよ。ユウキくんも予言の壁画を見たはずよ」

「確かに二人の巨人が現れると書いてあったけど、人類の破滅なんて書かれていなかった！」

ハルカちゃんは少し考え込むと何か答えを見つけたみたいだ。

「魂の祠の壁画は古いものなの。海底洞窟にある壁画の方が新しく、言わば最新の予言なのよ」

海底洞窟の予言の壁画にはそんな事が描かれていたなんて……

「予言に従って人類を破滅させるなんて間違ってる！確かに人間は間違っていることはあるけどそれを反省して未来に向かって行くことも出来るんだ！」



「予言だけではないわ……。詳しい事はマグマ団のアジト跡地を調べることね」

マグマ団のアジトの跡地？ミナモシテイにあるあそこに一体何が？

「大体人類を破滅させるだなんて……。それじゃあハルカちゃんも滅びると言うことじゃないか！」

ハルカちゃんは僕のこの言葉を待っていたと言わんばかりに笑顔になる。

「何を言ってるの？私達、もう人間じゃないわ」

ハルカちゃんの言葉に心臓が跳び跳ねる。

「光を受けてウルトラマンになれる……。普通の人間に出来る？私達は選ばれた生命よ」

「選ばれた生命……。？」

「ユウキくん、私は貴方とずっと、いつまでも一緒にいたい。ポケモンと地球の怪獣、私達だけになった世界で永遠に暮らすのよ」

僕は頭の中が混乱していて、まともな思考を出来る状態ではない。ハルカちゃんもそれに気づいたようでラティアスを繰り出し背中に乗る。

「いきなり答えてとは言わないわ。今度会ったときに答えを聞かせて」

ラティアスはそのまます上空へ姿を消した。

ハルカちゃんとの折角の再会。こんな気持ちになるなんて想像もしなかった。唯一つ、心の中でずっと思っていたことがある。僕はその思いを海に向かって叫ぶ。

「君の考えは絶対に間違ってるぞ！」

## 第11話 新たなる組織

青いウルトラマンが公にされ、二人のウルトラマンは人々から熱狂的な支持を集めている。しかし、その中身が人間でしかも一人が人類の破滅を目論んでいるなど人々は夢にも思わないだろう。

ヒカリはユウキを心配していた。家に帰ってきてからずっと元気が無い。声をかけても本当に聞いているのか分からないほど力の抜けた声。

「ユウキ、何があったのよ?」

今日、何回目かわからない質問。

「……………いや、本当に何でもないんだ」

「何でもなかったらそんなふうにはなりません」

「……………」

「ユウキ、話してみればスッキリするんじゃない? 私、聞き下手だけだよ」

ユウキの重かった口が開く。

「人って、地球にとってガン細胞なのかな。無くなった方が良いものなのかな?」

ヒカリはごく最近同じ様な事を聞く少女を思い出す。

「もしかして、ラティアスに乗った女の子?」

「え…? 知ってるのか?」

「前、伝言を貰ったじゃない」

ユウキはとても驚いた顔でヒカリを見つめる。あの時、アドバイスをくれたのはハルカだったのだ。

「悪い人じゃなさそうなんだけどね。人類にだって良い人はいっぱいいるのになんであんなことを言うのかな?」

悪い人じゃなさそう、か。彼女がウルトラマンとポケモンと地球怪獣だけの世界を作ろうと言っていると云ったらヒカリはどう思うんだろう?

そもそも僕はウルトラマンでもう人間ではないのか？僕が人々を守る理由ってなんだ？そんなことを考えてると、テレビに速報が入る。

『速報です。アルケミー・スターズは全国の若い優秀な人材を集め、根源的破滅招来体と戦うことを決定しました。∞エネルギーを中心とした地底貫通爆弾や星一つを破壊するR1号の開発など怪獣対策をさらに強化する方針で………』

「きつと、良い人が頑張ってもどうにもならないことがあるんだろうね。悪い人だつて、自分のやってることにきつと悩んでる。本当に自分が正しいのか、つて。………だからウルトラマンが現れたのかな」

「ウルトラマンが正しい、……本当にそうなのかな？」

苛立ちから僕はヒカリの言葉を否定するような強い口調で言う。

「少なくとも、ウルトラマンは良い人だよ。私の事を助けてくれたもん。どんな理由があつてもそれは変わらない」

ハツとした気分だった。嘘だと思いたいハルカちゃんのことを考えているうちに、いつの間にか自分の気持ちすらも嘘のように感じていた。僕はウルトラマンガイアであり人間なんだ。自分の考えや行動が正しいとか正しくないとか、そういう問題じゃない。

「ヒカリ、ありがとう。すつごくスッキリした」

僕は自然に笑顔になつてたのかもしれない。

「そう？どういたしまして」

少し照れくさそうなヒカリ。人って感謝を向けられるとこういう風になるのかな？

アルケミー・スターズで実権を握る二人の若い天才。彼等は∞エネルギーが世界を救うと信じて疑わない。

「∞エネルギーの使用を反対するのはどうとうミツル君だけになりましたね。彼はコツヴ相手に通用しなかつたつて言うけど、あんなちゃん

けな戦闘機を例に出されたらこっちは困りますよ」

「現実を見てないのだろう。ポケモンと協力してあいつらに何が出来る？たかが改造されたコータスをガイアと倒しただけだ。リーグチャンピオンになったからって勘違いしてるようだが人類が奴等に對抗する術はこれしか方法が無い」

アルケミー・スターズのメンバーはの多くはミツルに対して否定的な態度を取る。理由は一つ、彼がポケモンのエネルギーを使う∞エネルギーの開発をずっと反対し続けているからだ。

「これから全国から優秀な人材が集まる中で、彼に賛同してしまう人も一定数いるでしょう」

「我々の邪魔はさせないよ。一時的に謹慎処分にしてあいつの居場所を無くしてしまうんだ。そうすれば∞エネルギー使用に領かざるをえないはず」

「根源的破滅招来体を相手には甘いことなど言ってられないですね」

「言ってることはわからんでもないがな。奴は優秀な研究者だしこれからも利用させてもらう」

こうして新生アルケミー・スターズ結成直前にミツルは謹慎処分を受けってしまう。

チャンピオンロード前に一人の少年がやり場のない感情をぶつけてた。

ミツルは途方に暮れていた。自分の意見が絶対に正しいとは思わない。だが、彼らに気付いて欲しかった。どんなに凄い兵器を作り出して相手はその兵器に対抗する怪獣を送り込むだろう。そうしたらまた自分達もつと凄い兵器を作る。ポケモン達の命を犠牲にして。

この繰り返しに何の意味がある？強い兵器を作れば危険だとみなされ他の侵略者も現れるかもしれない。別のエネルギー源を探す努力もしないで根源的破滅招来体と戦えると思うところそが間違ってるはずだと。

しかし、謹慎になったミツルには全て関係ない事だった。

「エルレイド……僕も、ガイアのように自分自身で戦えるような力があればこんな思いをせずに済むのかな？」

エルレイドは心配そうに主人を見つめる。すると、誰かがエアームドに乗って降りてくる。エルレイドは主人を守るように前へ出た。

「聞いたよ。アルケミー・スターズをクビになったんだってね」

なんと、ダイゴがミツルを探してわざわざチャンピオンロード前までやって来たのだ。

「………謹慎処分です。まあ、実質クビみたいなものなんですけど」  
「なら、辞めてしまえばいい」

「そんな簡単に言わないで下さい！」

ミツルらしからぬ激昂した姿を見てダイゴはすぐに謝る。そして本題に入った。

「率直に言うよ。アルケミー・スターズを辞めて僕達と一緒に戦おう。君は僕達の組織の頭脳になってほしい」

ジムリーダーや名のあるポケモントレーナーを集め、根源的破滅招来体へ対抗する新たな組織。

「∞エネルギーを使わないと約束しますか？」

「もちろんだ。人とポケモンの絆で奴等と戦う。綺麗事と言われたっていい」

ミツルの心は完全に動いていた。秘密でアルケミー・スターズのデータベースから重要な情報をピックアップしたメモリーチップが彼の手のひらの上にある。

「怪獣のデータ分析が出来る機器をまた作り直します。あっちのよりももっと凄いのを作ってやりますよ」

「心強いよ」

名前はまだ無い新しい組織。スカウトはミシロタウンのとある家

にも来ることになる。

「久し振りだねえ、ホウエン。ババ様とシガナは元気かな」

ボーマンダの上には一人の女性。

「根源的破滅招来体か…。流石の私も想像出来て無かったかな」

彼女はそのままミシロタウンに直行する。理由は一つだけ。

「救世主ウルトラマンガイア。ユウキなら何か知ってると思うんだよねー」

## 第12話 初恋はウルトラマン!?

ダイゴやミツルを中心に根源的破滅招来体と戦うために組織されたExpansion Interceptive Guardians (通称X.I.G)が結成された。

メンバーにはホウエンのジムリーダーや四天王を加え元チャンピオンであるユウキ、シンオウのチャンピオンのヒカリの加入が決まる。しかし、組織としては未熟で資金、技術提供を受けにくいため世間からも新生されたアルケミー・スターズより劣るとの見解が多い。それでもエリートトレーナー達によるエリートポケモン軍団は今後の活躍に期待されている。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX  
 X I G 結成前

「ねえ、お客さんが来てるよ。ユウキの知り合いだって言ってるけど……って！勝手に入らないで下さい！」

「ユウキー！久し振り！元気だった？」  
 僕は目を疑った。かつて共に世界を救った後、消息を絶ったヒガナが目の前にいる。

「ちよつとユウキ！この人あんたの何!？」

ヒカリは僕に声を荒げて聞いてくる。別に何って言われるほどの関係じゃないけどね。

「ん？まさか、そういう関係？大丈夫、元カノとかじゃないから安心して彼女さん」

ヒガナはケタケタ笑いながら僕達をからかってきた。

「ち、違う！そういう関係じゃない!」

二人の声が重なる。こういう話題は相変わらず苦手だ。ヒカリも顔を赤くして怒ってる。

「別にここに長居する気はないからさ、聞きたいことだけ言うね」

ヒガナはいきなり真剣な面持ちで僕を見る。

「ガイアとユウキの関係、またはあの青いウルトラマンとの関係って

「どうなの？何か知ってるでしょ」

「僕は思わず動揺する。その小さな動揺を逃さなかったヒガナはニヤリと笑う。」

「あー、もういいよ。知りたい答えは見つけられたし。じゃねー」

「突風のごとく現れたと思いきや微風のように爽やかに帰っていったヒガナ。」

「あ、あの何者？凄いくせのある人だったけど……」

「話すと長くなるんだよなあ」

「……………それにユウキとガイアの関係って？」

「やはりその話を突っ込まれるか。ヒカリには話していいだろうか？すると、突然ポケナビが鳴る。」

「お久しぶりですユウキさん！」

「正直、助かったと思いつつながら画面付きの通話機能を開く。この子は確か……」

「もしかして……………双子のクミちゃん？」

「かわいい子ね」

「六年ぶりに見る彼女は幼稚園児なりたての頃から大分大人になった。まあ、まだ小学校高学年くらいの子供だけだ。」

「ああ！覚えてくれてたのね！流石私の未来の旦那様！って、隣にいるのは誰?!浮気ですか!」

「……………ユウキ、あんたこういう趣味が」

「ヒカリは軽蔑の眼を僕に向けてきた。」

「彼女が勝手に言ってるだけだから!」

「会った時から一目惚れをされたらしくポケナビの番号を無理矢理聞かれて以来、しょっちゅう会いに行かされたっけ。」

「相談があるから聞いて下さい!」

「また好きな食べ物とかどんな子がタイプかを言わなきゃいけないのかと落胆する。しかし、予想外の展開になる。」

「妹のルミがウルトラマンガイアに初恋中なの!だから、どうすればいいかアドバイスして欲しいの!ついでにデートもしましょう!」

「僕もヒカリも目が点になる。とりあえず二人で彼女達の所に行く」



ことした。

103番道路キンセツ方面、二人が僕達を待っていた。

「あーっ！やっぱり浮気だったのね!？」

「違うから……それよりルミちゃん。初恋の相手は本当に……」

ルミちゃんは頬を赤らめて小さく頷く。六年前より大人しく引つ込み思案な彼女。

「どうしてガイアの事が？」

「……………助けてもらったから」

どうやらアパテーとの戦いの最中近くにいたらしく、  
たまたま助けてしまったらしい。姉と違い一目惚れではないにしても同じように面倒な事になりそうだ。

ルミちゃんはとにかくガイアに会いたいらしい。根源的破滅招来体が来ればガイアに会えるので怪獣が来るのを楽しみにしてしまってる始末。地球の危機になんて子だよ全く。

「じゃ、この話はとりあえず後回しで私とユウキさんでデートしまーす!」

「ええっ!？」

無理矢理引つ張られる。どうやら妹の相談を口実にキンセツシティでショッピングデートがしたかったらしい。アプローチの仕方が若干上手くなってるな。

「ルミちゃんと私は後から追い付くから」

ヒカリはルミちゃんを一人にさせないために僕らと別行動をする。

……………しかし、厄介な事になったなあ。

「ルミちゃんはガイアが大好きなのね。実はね、私もガイアに助けて貰ったことがあるの」

「お姉ちゃんも…?」

「私もガイアの事が好きなの。ガイアが好きなら彼の事をこれからもずっと応援してあげて。そしたらきつとガイアもルミちゃんの気持ちに応えてくれる」

ルミは小さく頷いた。そして、ついでにヒカリに質問をする。

「お姉ちゃんはユウキさんの事が好きじゃないの?」

子供の純心な質問にたじたじするヒカリ。とりあえず誤魔化そうと必死で何か言い訳を考えようとして出た言葉が…。

「どっちも大好き!いや、そういう意味じゃ…」

「お姉ちゃん、二人も好きな人がいるなんてエツチだね…」

「ヒカリはエツチになっちゃった。」

「そういう意味で言ったんじゃないの!」

ユウキはクミとデートの真っ最中。周りの視線が痛いほど突き刺さるのを感じながらも一応は楽しむ二人。

「ねえ、そろそろ二人と合流…」

「ダメ」

「うなるとあと何時間も付き合わされると心の中で悪態をつきながら仕方なく従うユウキ。」

「私ね、よくルミと似てるって言われるんだ。でも性格も好きなものも全然違うんだよ!失礼しちゃう!似てるのは顔と身長だけよ!」

とうとうデート中に愚痴まで言い始めてしまうクミ。ユウキは心の中でげんなりしながら後続の二人を待とうと思ったその時だった。

「か、怪獣だー!」

「117番道路の育て屋から怪獣が!」

怪獣が出現したため、ユウキはクミにヒカリ達と合流するよう伝えるところ現場に走って行く。

117番道路上空には巨大なワームホールがある。どうやら根源的破滅招来体を送り込んできた怪獣らしい。ユウキは周りに人がい

ないのを確認するとボールを取りだし光に包まれウルトラマンガイアへと変身する。

育て屋に現れた怪獣ダイゲルンは肉食怪獣で預けられたポケモンを食べようとしていた。そこに産まれたばかりのチリーンが逃げ遅れてしまう。このままだとチリーンが怪獣に食べられてしまう。

「チリーン！」

産まれたばかりのチリーンは何も出来ず、泣いていた。ダイゲルンはチリーンに気づき噛み付こうとした次の瞬間だった。

「デュアアアア！」

目の前にウルトラマンガイアが現れ、着地と同時に地表を揺るがし土埃を舞わせる。ガイアは回し蹴りを怪獣の脇に食らわせダイゲルンは横に倒れる。

「チリ……？」

ガイアはチリーンの安全を確認するとダイゲルンの尻尾を掴み振り回す。

「デヤアアア！」

ダイゲルンはそのまま受け身を取れずに落下する。そこへガイアが馬乗りになって首に手刀で連撃を繰り返す。

キンセツシティでガイアの戦いを見る三人。

「ガイア……！」

メロメロなルミに隣で騒ぐミーハーなクミ。そして、前に出ようとしてしまう二人を抑えるヒカリ。

「わかったから二人とも落ち着いて！」

ガイアは馬乗りになってそのまま怪獣を倒す勢いで連撃を続ける。するとダイゲルンがガイアの腕を噛み始める。

「グワアアア！」

ガイアは腕を噛まれたままダイゲルンに振り回される。ガイアはなんとか脱出しようと蹴りを入れるがダイゲルンのアゴはそれしきのことでは緩まない。

ダイゲルンは逆にガイアのボディにパンチを食らわせガイアが腕に込める力が弱くなるとますますダイゲルンの噛む力が強くなり歯が食い込んでくる。

「負けないでウルトラマンガイア！」

大人しかったルミが大声でガイアを応援する。ガイアはその声に応えるように腕をダイゲルンごと地面に叩きつける。たまらずダイゲルンは腕をか解放し、ガイアは距離を取ると頭頂部に光を集めフォトンエツジをダイゲルンに放つ。

「ハアアア！デエアアアア！」

タフなダイゲルンは爆散こそしなかったものの凄まじいエネルギー量を受け今にも倒れそうだ。ガイアは腕に光を集めると左腕を肘につけ右腕を縦にする。そこから強力な光線ークアンタムストリームを放つ。

今度こそダイゲルンは爆散しウルトラマンガイアは空へ消えた。

ユウキはキンセツシティに戻ろうとすると、さっき助けたチリーンが木陰でユウキを待っていた。

「チリーン！」

チリーンは尻尾のようなものでユウキをグルグル巻きにする。これはチリーンの求愛行動であり、それを知っていたユウキは困惑する。どうやらウルトラマンガイアの正体を早速見抜いてしまったようだ。

「チリーン、皆には内緒だよ」

チリーンをゲットし、ボールに入れる。まさか、人間だけでなくポケモンにまで好かれるとはウルトラマンは凄い存在なんだと思うユウキ。

「ユウキ！無事で良かった！」

ヒカリ達と合流すると、ルミがとても満足そうにしていた。また会いたいと言っていたが、怪獣と戦うのは楽じゃないのにと心の中でトホホとするユウキ。

帰る途中、二人は双子ちゃんの話題が尽きなかった。ヒカリも最初にはユウキがロリコンなのではないかと心配してついてきたので疑惑が解消されて素直に良かったと安心している。

ユウキはお騒がせな双子ちゃんにコリゴリのようだ。ただ、二人はやはり良く似ていると彼は改めて思う。

『似てるのは顔と身長だけよ！』

(顔と身長だけじゃない。好きな人にゾツコンな性格も好きなものも丸つきり同じじゃないか)

## 第13話 嘲笑う眼（前編）

X. I. Gに加入したユウキとヒカリ。二人はダイゴの指令によりヒマワキシテイの近くに来ていた。理由はこの辺りで多発する謎の怪現象の調査で、被害者の全員が地面に巨大な眼を見ているのだ。

本当はヒカリとミツルで行く予定だったがミツルとヒカリはオカルト系がダメで、ミツルは行くことを拒否してしまうくらい怖がり屋だった。ヒカリは一人では行きたくないと文句を言っ行って行こうとしない。なので、仕方無くユウキも付き添うことになったのだ。X. I. Gを結成して間もないが、早くも将来に不安を感じずにはいられないユウキとダイゴだった。

現場近くを空から確認する二人。

「この辺りでいいんだよな……？……？……ヒカリ。そんなにくつつかれるとちよつと困る……なんて」

本当は恥ずかしいから離れてくれと言いたかったユウキ。でも離れてしまうとそれはそれで残念な気持ちになるのは男の性か。

「ダ、ダメ！離れたら私死ぬから！」

幽霊が出るわけでもないというのに、手を離そうとしないヒカリ。ユウキは怪獣が平気なクセにと心の中で静かに思う。

「巨大な眼なんて何処にも見当たらないぞ。やっぱ噂に過ぎないってことなのかな？」

「噂だったら被害者なんかでないわよ！」

ユウキが特に考えもせずと言った言葉に対して猛烈に反論するヒカリ。首をブンブン振っているとヒカリが異変に気付く。

「ねえ…ユウキ。緑でイッパイのこの場所でアソコだけ何も無い所があるよ」

「本当だ……。しかも形が……」

周りが緑で生い茂っているのに、その部分だけ眼のような形で地面が剥き出しになっていた。

「成る程、巨大な眼に見間違えても仕方無いかもしれないねこれじゃ」

「ほ、本当に幽霊じゃないのね……?」

少なくとも巨大な眼が原因ではないと二人が結論付けようとしたその時だった。

剥き出しになっていった地面が巨大な眼に変貌する。その眼は笑っているように見える。ユウキは急いでミツルに通信を繋ぐ。

「ミツル君！ 奴のデータを！」

「そ、それが……正体がわからないんです」

「ゆ、幽霊なのねやっぱり!？」

「ゴーストタイプのポケモンとも違う。こんな生物がどうやって存在しているんだ!？」

ミツルは珍しく声を荒げて頭を抱える。構成している物質も、そもそも生物かどうかもわからないなどミツルには初めての出来事だった。

「落ちついてミツル君。君が頼りなんだ」

ユウキはどうにかミツルを落ち着かせようとする。ユウキの声に冷静さを取り戻したミツルは巨大な眼について自分の見解を述べる。

「あの眼には生物が持っている熱反応を一切確認出来ない。ゴーストタイプのポケモンでも持っているものがあの眼にはありません。あそこには何も無いのと一緒なんです」

「でも、あそこには確かに……」

「構成している物質に僅かに金属反応が確認出来ます。概念的には生きて見えるように見える。しかし、生物としての条件を充たしていない」

謎の巨大な眼は黒目の部分がニツコリと笑っているように見える。まるで彼らを嘲笑うかのように。すると上空にいる二人に岩を飛ばしてきた。

「どうやら、奴は僕達を敵だと思ってるみたいだ」

「攻撃した方がいい?」

二人は攻撃許可を取ろうとする。ミツルが決めあぐねているとダイゴが二人に指示を出す。

「攻撃許可は出来ない。正体がわからない以上、手を出すのは危険だ。」

生態反応が確認出来ない一方で金属反応があるのも気になる。しばらく周辺の安全な所で避難してくれ」

ダイゴの指示に従う二人。すると、前方から戦闘機が現れた。アルケミー・スターズが∞エネルギーを使って開発した戦闘機で、コッヴの時の物とは比べられない程性能が上がっているのはその速さを見れば一目瞭然だ。

戦闘機はそのまま攻撃を開始する。以前よりパワーアップしたエネルギー弾とそれを補助する形でミサイルを撃ち込む。

しかし、それら全部が吸収されてしまった。

「気持ち悪い……」

ヒカリが思わず口にする。黒目の部分がまたも笑う。ミツルは画面越しにその眼を見る。

「う、うう……」

「どうしたミツル君？」

ミツルを心配するダイゴ。一瞬目が虚ろになったミツルは汗がふきだし焦点の定まらないまま指示を出す。

「あの眼を攻撃……してください」

「！………いいのかい？」

「あそこにいる以上、生物として断定しても問題ないでしょう。それに吸収にも限度があるはずです。攻撃を加えればエネルギーが膨張して倒せるはずですよ！」

「わかった。ユウキ君！あの眼に攻撃許可を出す。ただし、様子見としてヒカリちゃんは安全地帯を離れないでくれ。ユウキ君の攻撃が有効だと確認出来ればヒカリちゃんも攻撃に加わるんだ」

「了解！」

ヒカリはムクホークを出し、ユウキから離れる。ユウキはラティオスに攻撃を指示する。

「ラティオス！りゅうせいぐんだ！」

凄まじい威力の攻撃が眼に向けられる。しかし、それも眼の中に吸収されてしまう。

ユウキが次の攻撃を指示しようとした次の瞬間だった。眼から戦



闘機の撃ったミサイルとりゆうせいぐんが一斉にユウキを襲い、そのまま墜落して行ってしまう。

「ユウキッ！」

ヒカリはユウキが墜落した所に一直線に向かう。アルケミー・スターズの派遣した戦闘機も本部に帰還する。

眼は嘲笑いながら何処かへと消えた。

「……………ぼ、僕のせいだ」

ミツルは掠れた声でそう言うのと倒れてしまった。ダイゴはミツルをすぐに介抱しユウキとヒカリの無事を願う。

ヒカリはユウキを見つけたが、ユウキは体の至る所から血を流し生きているのが不思議なくらいだった。ヒカリは急いでかいふくのくすりをユウキに使うが効果があるように見えない。

「おねがい！死なないでえ……！」

ヒカリが涙を流しながら叫ぶとユウキのボールからチリーンが出てきた。

「チリーン！」

チリーンはいやしの波動と体の傷を癒し、いやしの鈴でユウキを元気づけようとするが、それでもユウキは目覚めない。

すると、光輝くボールが眩しい光を放ってユウキ達を包んでいく。

「なにこれ！あ、あつたかい……」

光に包まれるとヒカリも気を失ってしまい、ユウキの上に重なる。

そしてその光景を見つめる少女。

「ガイヤのヒカリ……こんな能力もあるのね」

ルカは二人をラティアスに乗せて近くのポケモンセンターを指した。

????????????????????????????????????

「お前、体が弱いくせに生意気なんだよ！」

「弱虫ミツル！悔しかったらポケモンの一つでも捕まえてみやがれ！」

弱虫！弱虫！弱虫！弱虫！弱虫！弱虫！弱虫！

お前なんかいなくなつちまえ！

「うわああああ！」

ミツルは目を覚ます。どうやら自分は医務室にいたみたいだ。

「あなた、ずつとうなされてたのよ」

たまたま居合わせたツツジがミツルの看病をしていた。どうやら丸一日中気を失っていたらしい。

「ユウキさんやヒカリさんは!?無事だったのですか!?!」

「ええ。二人ともヒマワキのポケモンセンターに運ばれて無事が確認されましたわ。ユウキさんは絶対安静らしいですが」

「僕のせいだ……。僕のミスで……」

ミツルは自分の軽率な行動でユウキ達を危険に晒したことに責任を感じていた。

あの巨大な眼は心の中の何処かで見たことがあると思っていたが、体が弱くいじめられていた頃に他人から見られていた眼と全く同じだったのだ。

人をいじめて嘲笑うときの眼。自分には決して理解出来ない感情。

「そんなに気にすることではありません。私達は根源的破壊招来体と戦うことを決めてからこうなる覚悟は全員出来ています。でも、覚悟がないまま戦うのならここにいる資格はありませんわ」

ツツジはそう忠告をすると部屋から出ていく。ミツルはツツジが自分を叱ってくれた事を感謝したが、巨大な眼の正体がわからないため今のミツルにはどうすることも出来なかった。

